
やっぱ異世界トリップは甘くなかった・・・

さすらいのケモナー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やっぱ異世界トリップは甘くなかった・・・

【Nコード】

N1416V

【作者名】

さすらいのケモナー

【あらすじ】

歴史好きで考古学ファンの犬神史郎は、ある日遺跡の調査中に異世界に飛ばされてしまう。

そこは、獣人と呼ばれる人たちが暮らし、日々厳しい自然に立ち向かっているサバイバルワールドだった。

史郎は拾ってもらった獣人と暮らすうちに、少しずつ自分の世界の知識を使って生活を改善していくが、その結果は史郎の予測を遙かに超えるものになっていく・・・。

異世界トリップモノです。主人公の能力チート無し、ハーレム無し、ヒロイン無しで進めていく予定です。剣と魔法の世界ですが、戦闘はあまり書かない予定です。

異世界での生活を、淡々と書いていく異世界生活小説を目指します。

初めての小説ですが、よければ見て行ってください。

始まり（前書き）

この小説は、作者の思いつきと過去の走り書きを投稿したものです。

よろしければ見て行ってください。

始まり

世の中には、今の世に馴染めずにひっそりと生活している人間が居る。

この話の主人公も、そんな現実には馴染めない一人の人間だった。

時は平成。バブルが弾け暗い世の中。

高校を出ても良い就職先にも恵まれず、ぼくはただアルバイトの日々を送っていた。

僕の名前は犬神史郎、今年で25になるフリーターだ。

フリーターと言っても最近是不況で日雇いのアルバイトも無く、預金を取り崩して生活している。

趣味は考古学と史学で、暇を見つけては遺跡や古寺名刹を回ったり、地元の人しか知らない神社などを巡っている。

今日も地元民しか知らないであろう古い神社に調査しに来たのだった。

この神社は本尊が洞窟にあって、恐らく古墳の石室を利用したものじゃないかと当たりを付けて、前々から調査したかった神社だった。

調査と言っても写真を撮ったりメモを取るぐらいで、本格的な遺跡の調査とは程遠いけど、趣味でやってるんだからこれくらいでち

ようどいい。

「やっと着いた。にしてもなんでこんな辺鄙なところに神社があるんだよ。まったく」

若干こんな所に神社を建立した古代人に恨み言を言いつつ、まずは神社に参拝して、それから例のご本尊のある石室を調査することにした。

「おお、これは・・・」

石室は入り口が人が二人並んで入れるほど広く、天井も高かった。

明らかに人の手が加わった事がわかる壁のノミ跡。石積みとされていた石室は岩窟のようだった。

「ふむふむ、岩窟だったのか。ちょっと残念だな。石積みとかもって人工的な遺跡だと思ったんだけど・・・」

そんな独り言をぶちぶち言いながら、史郎は石室の奥へと進んでいった。

奥は薄暗く、足元に注意しながら進んでいった。

そして、一番奥には石棺を利用してこの神社のご身体が祀られていた。

「やっぱり古墳だったんだな。昔から地域の重要な祭場だったのかな」

取り敢えず、石棺の写真を撮ろうと近づいた史郎は、突然足元の感覚の無くなったのに気づいた。

「!?!」

そして、急速に落ちていく感覚に驚き気を失ってしまったのだった。

まぶしい・・・

ここは・・・

僕は一体・・・

「(おい)」

「ううう・・・あれ？オレは一体？」

「(気がついたか?)」

「!?!」

「（何を驚いている？）」

驚いたのである。兎に角驚いたのである。

気がつけば、目の前に犬？顔の人が出現したのだから、驚かない
ほうがおかしい。

昔読んだ東方見聞録に、犬頭人と言う人間が居るって書かれてい
たけれどリアルで出会うとは思わなかった・・・。

「あ、あの〜」

「（ほら、早く帰れ。ここは人間がおいそれと来て良い場所じゃな
い）」

「それ、被り物ですか？」

「（さっきから何言っているんだ？）」

言葉が通じず、悪戦苦闘状態である。取り敢えず状況を整理しよ
うと、史郎は目を瞑り考え始めた。

「（おい、どうした？具合でも悪いのか？）」

犬？顔の人が何か言っているが、それすらも史郎はあえて無視し
て考えに没頭する。

えっと、まず神社に行って、そんでもって石室で調査をしてたん
だよな。それから・・・

完全に自分の世界に入ってしまった史郎だったが、しびれを切らした犬？顔の人によって史郎の思考は中断された。

「（おい！）」

「うああ！？」

「（いい加減にしろ！ここは神聖な場所なんだ、何時までも人間に居られるのは迷惑だ）」

「あゝええつと……言葉通じませんよね……」

犬顔の人が何に対して怒っているのか分からず困惑する史郎に、相手は若干苦い顔をして改めて問いかけた。

「（お前、捨て人か？）」

「……」

「（はぁ……、捨て人なら帰れとも言えないな……）」

「あゝ、ここはどこですか？」

「（仕方ない、村まで一緒に来い）」

結局、史郎は犬顔の人に連れられて、その場を後にするのだった。今まで混乱して気づかなかったが、今居た所は例の石室と同じ作りの岩窟のようだった。

犬顔の人に引っ張られるように歩かされながら、周りを観察した。
植生が違う？

明らかに生えている植物が、今まで居た場所の植生と違っていた。
植物にはあまり詳しくないが、そんな史郎でも分かるくらい日本
では見たこともない植物が、生えているのがわかった。

ただ、全く違う植物がある反面見知った植物もちろほら見えるの
でそれが史郎を混乱させた。

ここは一体どこなんだ!？

そんな感じでぼんやりと考えていると、何時の間にか村らしき場
所に着いた。

なんでそんなに曖昧な表現なのかといえば、明らかに史郎の知っ
ている村とは違ったからだ。

まず家がすべて竪穴式住居そのもので、住んでいる人も見える範
囲の人？が犬顔だったのだ。

なんだここ・・・テーマパークか?・・・

「(お、ろうやおかえり)」

「(元気にしてたか、ちびすけ)」

「（うん！）」

「（そうか）」

「（ろうや、後ろのそれは？）」

先程から手を放して、子供？と思われる犬人（史郎命名）と自分を連れてきた犬人が何か喋っている。

聞き取ろうとしても、全く意味が解らず頭が痛くなりそうだ。

どうしてこんな事になったんだ？僕はどうなるんだろう？・・・

「（ああ・・・こいつはちょっと分けあって、村に連れてきたんだ）」

「（そうなんだ、こんにちは兄ちゃん！！）」

「うわぁ！」

「（！？）」

突然犬人の子どもが、史郎に飛び掛って来たのでとっさに避けてしまった。

犬人の子どもはよほど運動神経がいいのか、転びもせずに着地した。

「（ひでえな兄ちゃん！怪我したらどうするんだよ！）」

「あのー、お願いですどうか僕を元の場所に返してください・・・返して・・・」

「(お、おい、どうした?)」

そこで史郎は、緊張の糸が切れたのか突然泣き出してしまった。

突然のことに今まで自分でも気づかぬうちに、だいぶ神経が高ぶっていたらしい。

その後は号泣して兎に角泣きじゃくる史郎と、それを必死でなだめる大人達の姿があった。

始まり（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

生活（前書き）

相変わらず、話が長い割に要領を得ない話しになってしまった・
・
o r z

7月29日内容を若干いじりました。

生活

一年後

「おはよう、ろうや」

「おはよう、史郎」

「今日も縄張りの見回り？」

「ああ、最近人間が何かと入って来ているみたいだからな」

「そっか、気をつけてね」

あれから色々有って、史郎は例の村で生活をしていた。

この家は”ろうや”の家で、史郎はここに居候している身だ。

結局あの後、史郎は泣き疲れて寝てしまい、気が付くと”ろうや”の家で寝ていたのだ。

言葉もわからず人間も居ない場所で、不安を覚えた史郎だったが、元々動物が大好きだった史郎はすぐに彼ら狼獣人（犬ではなく狼だった）を好きになっていった。

狼獣人たちも最初は突然現れた人間に嫌悪や、あからさまな警戒をしていたが、笑顔で毎日挨拶してくる史郎と話すうちに段々と仲良くなっていった。

元々素朴な生活をしている彼らは、敵と味方を見分けることに長けている。

史郎が敵ではないと本能的に彼らは感じて、今ではそれなりに村人たちから認められていた。

「史郎く、あゝそくぼく！」

「おっと、こら！いきなり飛びつくなんて何時も言ってるだろ。ろう」

「いいじゃん、別に減るもんじゃないし」

勢いよく史郎の腰に張り付いて来た”ろう”は、何時もの元気で史郎に朝の挨拶をして来た。

”ろう”は村に着いた時、抱き付こうとしたあの子供だ。彼曰く挨拶の一環だと言うその抱き付きは、今や史郎にとっての朝の風物詩になっていた。

「地味に痛いから、いい加減やめてほしいな」

「そんなんだから史郎は駄目なんだよ。もっと鍛えて狩りに出られるようにならないとね」

狩りはこの村の男なら誰でもする仕事だ。主に成獣を迎えた雄の仕事なのだが、史郎は一度も狩りに参加したことがなかった。

「無理に決まってるだろ。大体僕は獲物を追うための強靱な足もなければ、仕留める爪も牙もないんだから無理に決まってるよ」

獣人の村人たちの狩りは、まさに獣そのものだった。全身を躍動させて獲物を追い、鋭く尖った爪と牙で獲物を仕留めた後、解体するのだ。

もちろんただの人間である史郎には、そんな芸当が出来るはずもなく、村で女性たちに混じって手伝いをしたり、細かい手作業が要る事などをやっているのだった。

”ろう”曰く「史郎って、ろうやの奥さんみたい」と言われてショックを受けたりもした。

そんな平和な一日を過ごしていた史郎だが、何時も気がかりなことがあった。

それは、なぜ自分はこの世界に来てしまったのかという事だった。

少なくとも、ここが日本でない事は一年生活して嫌というほど理解できた。

日本では、いや恐らく元の世界でも居ないであろう獣人が居る時点でまずそれは納得できた。

他にも、日本には無かった珍しい植物がいくつもあった。（超大型のシダ植物など）さらに、星が違うのも大きかった。

月是一个だが、地球の北半球で見られた北斗七星や、南半球で見える南十字星も見えず完全にここが地球の未来や、過去ですら無いことを認識した。

そして、いざ異世界に来たのだから、なにか自分が重大な使命を帯びて来たのではないかと思ったのは、決して自分がゲーマー脳だからではないと思いたい……。

何時か誰かが「勇者さま、お迎えに上がりました」とか言って、現れるんじゃないかと妄想していたんだが、結局未だに現れる兆しが皆無である。

そんなこんなで、この世界に来ておそらく一年程経つのだが（ここが地球と同じ365日かすら不明なので、一応数えて凡その数字だ）その間、言葉を覚えることや生活習慣を覚えるので、手一杯だったからそろそろ自分なりにやりたいことをやろうと思い始めた。

取り敢えず、作りかけの石器や道具類を完成させよう。

こちらに来て直ぐに、簡単な打製石器もどきと磨製石器もどきを作ってみたりしていたのだが、なかなかうまく行かなかった。今は、家の中に絶賛放置中だ。

なにせ、肝心の石器の使い道がないのだ。

この世界では、未だに狩猟採集生活がメインでしかも獣人の人たちは鋭い爪と牙があるおかげで、石器など必要ないのか使っている所を未だに見たことがない。

なので、必要なかったのだがここに来て、よく切れる刃物があれば良いんじゃないかと最近思い始めた。

やはり爪のない分、彼らが当たり前にしていることすらできないので（雄の場合、爪や牙を使い獲物を一人で仕留められることが、

獣人の成人の証で基本的に年齢で自動的に成人にはならない）せめて刃物ぐらいは無いとまずい気がしてきた。

金属器はまず無理だから、どうするかなあ・・・。

などと思いつつ、まず近場に良い石が取れる場所がないか探しに出た。

丁度、”ろう”がこの近くに黒光りする綺麗な石がある場所があると教えてくれたので、そこに行ってみることにした。

「うーん、良い石があればいいんだけど」

「石なんか採って何するの？」

「石を割ったりして、石器っていう石の道具を作るつもりなんだ」

「ふうーん、なんだか面倒くさそう。」

「まあ、君たち狼人は爪と牙があるから必要ないかもしれないけど、木を削る時とか便利だと思うよ」

「確かに、木とか削るときは爪が剥がれる時があるから便利かも」

「それで、その黒い光る石ってのはどのあたりに在るんだい？」

「もうすぐだよ。あ、ほらあそこ」

横を歩いていた、ろうが指をさした先には森が少々開けて、地面が露出した場所があった。

ところどころに黒い光る石がある。

ようやく目的地に着いた史郎は、鞆から道具を取り出すと早速手近な石を手にとった。

「うん、間違いない。黒曜石だ」

「黒曜石？なんだい、それ？」

「黒曜石って言うのはね、昔火山が噴火したときに溶岩の中に含まれていたガラスって言うのが、冷えて固まったものなのさ。」

「・・・よくわかんないけど、そんなもんが爪にかわりになるのか？」

「うん、黒曜石の石器はすごく鋭くて切れ味抜群だから色んなことに使えるよ」

「そっか、まあよくわかんねえけど取り敢えず見つかってよかったな！」

「うん」

鞆から取り出した、石器のハンマーで黒曜石を砕いて品質を見ながら良さそうなものを選別し、鞆に詰めていく。

そして、ある程度溜ったので村に帰ることにした。

「よし、じゃあそろそろ帰るか」

そして、僕達は村に帰ったのだった。

生活（後書き）

わざわざお読みいただきありがとうございました。

次回から、段々と現代知識を駆使して生活改善をするかもしれません。
せん・・・。

ストーンナイフ（前書き）

ここまで見ていただき、感謝感激です（ゝ；ω；ゝ）

改行や、段落。さらには句読点のつけ方が滅茶苦茶と言われている
ます・・・。

すみません、マジで書き方わからないのでこのままをお願いしま
す。

ストーンナイフ

製作

村へ帰って、早速黒曜石の加工に取り掛かった。

黒曜石は、ある一定の方向から圧力を掛けるとその面に沿って剥がれる性質があるので、コツさえつかめばかなり加工は楽だ。

「うーん、なかなか思い通りに割れないなあ・・・」

「史郎兄ちゃんて、結構ぶきつちよなんだね」

「・・・」

”ろう”に、ニヤニヤ笑いをされながら一生懸命石を叩きつけている史郎は、次第に丁度いい大きさの石の破片を得ることが出来た。大きさが大体、大人の男性の親指くらいの大きさの片刃の石包丁のようなものだった。

「よし、こんなもんでいいかな？」

「あ、出来たんだ！見せてみせて〜！」

「いいよ、ただかなり切れ味がいいから気をつけるんだよ」

「うん！うわぁ〜！綺麗……。透き通っててキラキラしてる・・・」

」

「だろ。金属のナイフもいいけど黒曜石のナイフは独特の味があるからねえ」

金属を見たことがない、”ろう”に金属ナイフの良さを語ってもしょうが無いのだが、完成したナイフの美しさに自然と史郎のテンションも上がっていたらしい。

やっぱり、実際に石器作りをしといてよかった。

考古学には色々な分野があり、そして研究の仕方で幾つか分類がある。

史郎は大学に行っておらず、いわば在野のアマチュア考古学者なのだが、その分様々な分野の研究を幅広く行うことができた。

その中の一つに、実験考古学と云うものがあった。

実験考古学とは、実際に古代人がどのような暮らしをしていたのかを土器作りや石器作りを通じて検証する学問だ。

ヨーロッパでは古くから石器作りの再現などが行われていて、その後石器以外の土器や住居など様々な物に発展していった。

日本では、1980年代頃から石器の再現や土器や土偶の再現などが始まり、近年では実際に石器で道具を作り、丸木舟を作ったりしている。

学問としては、まだ日本ではあまり専門の研究者は居ないが、教育現場では積極的に取り入れられていて、近年は小学校などで土器

や石器作りの授業が行われていたりする。

史郎も、実際に石器や古代の道具類を作った経験があり、それが今回大いに役立っていた。

その後、”ろうや”が帰宅してくるまで、”ろう”と二人で黒曜石のナイフ作りに熱中していたのだった。

「ただいま」

「あ、ろうや。お帰りなさい」

「ろうや兄ちゃんお帰り」

”ろうや”が帰宅すると、家の横で二人が一心不乱に黒曜石を加工しているところだった。

「なにをしているんだ？」

「あ、これね。黒曜石って言ってね。こうやって、石に圧力をかければぎ取るとできるんだけど、すごく切れ味が良い刃物になるんだ」

そう言って、史郎は先程完成させた黒曜石のナイフを、”ろうや”に見せたのだった。

「綺麗だな」

「ありがとう。だけど、それまだ完成じゃないんだ。これから柄を付けないといけないんだけど動物の骨か角が有ればいいんだけど」

「そう言えば、前に狩った獲物の角なら、あっちに捨ててあるが」
そう言って、”ろうや”は村と森の境目近くにあるゴミ捨て場を指さした。

この村では、どうやら動物から毛皮と肉以外はなににも取らずにゴミにしているようだ。

「マジで！？よっしゃー！早速ゲットしてくる！！」

「あ、待ってよ。おいらも行く！！」

史郎は、その場に道具を残して一目散にゴミ捨て場に向かった。

その後を、”ろう”も追いかけていった。

「やれやれ、ガキどもは・・・」

その後ろ姿を、やや呆れ顔で”ろうや”が口元に微笑を浮かべて見ていたのだった。

そして次の日、史郎は鹿の角のような硬く加工しづらい角と格闘していた。

「クソ！なんて、かてえんだよ！いい加減折れろ！！」

「朝っぱらからどうした？」

「あ、おはよう、ろうや」

「おはよう、史郎」

日の出の少し前から作業の準備をしていた史郎は、起きて来た”ろうや”にやや恥ずかしそうな顔をして挨拶をした。

昨日から、よほど作るのが楽しみだったのか、朝が弱いはずの史郎が珍しく”ろうや”より早く起きていて、”ろうや”は少々驚いた。

（史郎って、こんな奴だったか？何時もおっとりして、なにか何歩か遅れて動作している感じのやつだと思ったんだが・・・）

そんな、史郎に対して失礼なことを心の中で思っていた”ろうや”だったが、その思考が史郎によって遮られた。

「あのな、この角がさ、滅茶苦茶固いんだ。折りたいんだけど、全然折れなくて・・・」

「どれどれ、ちょっと貸してみろ」

そう言って、徐に史郎から角を受け取ったろうやは、まず爪で折りたい場所を周囲に沿って溝を掘りそして・・・。

「ぐう・・・！！」

「うわぁ！」

バキィ！っという音が鳴ったかと思うと、”ろうや”の手の中に在った鹿の角もどき（史郎命名）は、あっけなく溝に沿って折れてしまった。

「マジかよ・・・」

「ここだけでいいのか？」

「あ・・・いや、もう一箇所お願いします・・・。」

そうして、史郎はもう一箇所折る場所を指定して折ってもらいながら、獣人の力を改めて認識したのだった。

ストーンナイフ（後書き）

わざわざお読みいただきありがとうございます。

厚かましいお願いではございますが、もしよろしければ感想や、
評価の方をよろしくお願いいたします。 m () m

【雑談枠】 ストーンナイフについて（前書き）

どうも、自分の力量のなさに涙しながらこんなモノ書いてみました。

非常に内容が無い文章なので、読まなくても問題ないです。
暇つぶしにでもどうぞ。

【雑談枠】 ストーンナイフについて

史郎…こんにちは、このページは作者の趣味と自己満足の垂れ流しのためのページです。

ろうや…おいおい、いきなりあからさまだな……。

史郎…まあ、作者が小説を書かずにネタばかり溜まっていくから、それを発散する場がほしいんだってさ。

ろうや………まあそれはそれとして、ここで俺たちはなにをするんだ？

史郎…ここでは、各お話に出てきた物事についてうんちくを垂れるのがメインみたい。今回は、ストーンナイフだね。

ろうや…まずストーンナイフってなんだ？

史郎…えっと、実はこれあるホームページにたまたま載ってたので、それをそのまま使ったらしい……。

ろうや…おい、まさかそれはパ（検閲）

史郎…はい、そこ黙る。まあぶっちゃけパクリだけど。

ろうや…（こいつ自分でぶっちゃけてるし……）

史郎…まあ、それは置いというストーンナイフとは何かを説明するね。

ろうや・・・わかった。さっさと始めろ。

史郎・・・りょうかい。そもそもストーンナイフを日本語に訳すと石刀になるよね。

ろうや・・・なるな。

史郎・・・石刀って言葉は実は磨製石器で、ストーンナイフ事態は打製石器だから、恐らくこれはそのホームページの作者さんが考えたネーミングなんだと思う。取り敢えず石器の一種って覚えておいて、石器は分かるよね？

ろうや・・・ああ、あの石を石で殴って鋭くしたり縄で大きな石を括って斧みたいにしたりするやつだろ。

史郎・・・正解。詳しく説明すると石を砕いて加工した石器は、打製石器。大きな石を括ったやつは括る前に、石を砥石のようなもので磨いて形を整えたりしてるから、磨製石器って言うんだよ。

ろうや・・・なんだか、ずいぶんと強引な感じがするが・・・。

史郎・・・と、取り敢えず磨いた奴ってことにしておいて！！で、今回の黒曜石のナイフは石を打ち付けて加工してるから、打製石器だね。

ろうや・・・そうだな。

史郎・・・それで、この時の石器の作り方なんだけど石器はまず元となる石核^{コア}って呼ばれるモノを作らなければならぬんだ。

ろうや…コア？なんだそりゃ？

史郎…えっと黒曜石の場合だけど、まず適当な大きさ（大体人間の頭くらいよりちよつと大きい）の黒曜石の塊を手のひらに載る大きさで、且つお風呂の栓のような逆台形型に加工するんだ。

ろうや…なるほど、意外に手間がかかるな。

史郎…黒曜石の場合、石の特性としてある特定の方向から力を入れると、石が剥離するからこの方法がベストみたい。

ろうや…オレはもつと原始的に、適当に石で殴って加工しているの
かと思つてた。

史郎…以外に思うかもしれないけど、石器を作つてた古代人もかなり効率的に石器を作る研究をしてたんだと思う。黒曜石は他にも、木の棒で一箇所に圧力を加えて剥離させるとかの方法で、効率良く加工してみたんだよ。

ろうや…ふう〜ん、古代人も案外現代人と変わらない感じだったのかもな。

史郎…たぶんそうだと思うよ。後、石器の特徴として打製石器はその後どんどん剥片が小さくなって細石器なんてものも出てきたんだよ。

ろうや…細石器？

史郎…所謂替刃だね。つまり刃に当たる部分は黒曜石とかの石器で、あとの部分は木とかにして軽量化したり、刃を常に替えることによ

って切れ味の維持も出来たみたい。アステカ文明辺りの戦士が使ってたみたいけど、日本でも旧石器時代に使われてたみたいだよ。その時は投げ槍や、銛に使っていたみたい。

ろうや…けど石器って、鉄器には劣るよな。

史郎…うーん、硬さの面や切れ味が鈍くなったとき黒曜石のやつは研がないから交換しなければならぬとか後割れやすいとかは、あるけど切れ味や武器としての性能は問題なかったみたい。だからマヤ文明やアステカ文明は、金属が在っても石器を武器として使っていたんだと思う。金属器の利点は、何と言っても均一な規格で安定した品質の製品が生産できるってことだね。これが一番大きい。

ろうや…以外に石器って使える子だったんだな。

史郎…石器は武器以外にも、例えば稲を刈る鎌とかの刃の部分に使われたりして金属が普及するまでかなり使われていたんだ。だから石器が特別他の器具に劣るわけじゃないよ。

ろうや…歴史を学ぶと意外なことが分かるんだな。よしオレも石器作りにチャレンジするか！！

史郎…君は立派な爪があるでしょ！

【雑談枠】 ストーンナイフについて（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

こんなダメダメな文章を読んでいただいて、感激で涙が（T | T）

補足の補足

黒曜石の加工についての説明ですが、実際コアを作らずに黒曜石を石で叩いて形を整える方法があります。

その場合も、基本的に石の特性上一定方向から衝撃を加えてやると綺麗に表面が剥離するのですが、思わぬ方向に割れることも数々で、実際作ってみると分かるのですがコア方式の方が簡単に量産ができます。

一応今回の小説の中では、コア方式のナイフを作っていると思ってください。

以上、どうでもいい補足でした。

夕餉（前書き）

えっと・・・、ごめんなさい＞＜

全く進展しておりません、世界観もほとんど考えてなかった・・・

O r z

7月29日一部修正

8月01日一部加筆訂正

読者様からのご指摘で肉のみだと壊血病になる問題があることが判明したので、訂正しました。

夕餉

火起し

「出来た!!」

「お?どれどれ」

史郎の完成の声に、家の補修をしていた”ろうや”が振り返り、史郎の手元にある完成したストーンナイフを見た。

ナイフは、柄も含めても大人の手の先から手首あたりに来るぐらいの大きさだった。

柄は、例の鹿の角もどきを使っているので、微妙な窪みが縦に走り、まるで木のような質感をしながらも、艶やかにやや光沢があるため独特の味がある仕上がりになっている。

なにか、獣人の内に潜む原始の感情が揺さぶられる物だった。

「いいな……。とてもいい感じがする」

「あ、もしかして精霊の力を感じる?」

「いや、これはまだ出来たばかりだからなにも宿っていない。ただ、精霊が好みそうな物だなと思っただけだ。」

「そっか、ろうやがそう言うのならもしかしたら、なにか宿るかもしれないね」

「ああ、ただそんなに小さな物だと恐らく宿っても人に干渉するほどの力があるとは思えないけどな」

「そっか、どうせだったら滅茶苦茶強い精霊とかが宿って、魔法とかバンバン使えたら良かったんだけどなあ」

「戯^{たわけ}け伝説の器具ですら宿るかどうかだ、そんな精霊は。どう頑張っても無理だな」

「うぐう・・・」

「それより、良いのか？そろそろ薪を拾いに行かなきゃ為らないんじゃないのか？」

「あ！忘れてた！！ありがとう、ろうや、また後でね」

そうして、史郎は”ろうや”に慌てて挨拶をして黒曜石の片付けもそこそこに、夕飯用の薪を集めに行ったのだった。

☆

村と森との境界線付近は、史郎にとって村以外では最も馴染みのある場所だ。

村に始めてきた時、まず驚いたことは村人たちの食事がすべて生肉だった事だ。

村人たちは、火の存在は知っていたし実際、冬の一晩寒い時期などに暖を取るために使うらしいのだが、普段の生活で彼らが火を使うことは稀であった。

そもそも、獣人達は元々獣の部分が我々より多いので内蔵が非常に丈夫で、硬い骨も噛み砕いて食べることが出来た。

少々痛んだ程度でも全く問題なく食べていた。

更に、獣人達はそもそも闇を恐れないのだ。彼らは所謂食物連鎖の頂点に君臨するこの森の王者だ。そんな彼らの匂いに、獣達は皆恐れて近づかない。来るのは、匂いも解らず野生の掟に従わない人間くらいだ。

つまり、外敵というものが本能的にあまり意識されていないのだ。勿論警戒はするし、何時襲撃されても大丈夫なように成っているが、大体が人間の襲撃か他の種の獣人たちの襲撃なので、獣避けに火を焚く習慣が備わっていないのだ。

じゃあ、夜間の明かりは？と、聞かれればそもそも彼らは夜目が利くと答えておきましょう。

まあ、狼獣人はあまり夜目が利かないし、目も悪いのだが、そもそも夜になって作業をすることなんてほとんど無い。

こちらの世界では、日の出の少し前に起きだして朝食の肉の塊を食べたら狩りに出て、帰ってきたらそれらを村人で分けあって終わりである。

人間と同じ二本の腕と知能。更には獣の能力を持つ彼らにかかれ

ば、狩りなど何の苦もなく出来て当たり前なのだ。

なので、彼らは特に飢えることもなく平穩に日々を過ごしていた。

しかし、ひ弱な現代人である史郎にとってはいくら理屈は分かっていたからといっても、それを到底受け入れることなど出来なかった。

主に、肉体的な意味でだ。

まず、肉は生で食べたなら寄生虫と大腸菌で即アウトだ。

なので、史郎は最低限、朝夕の食事の時に火を起こして肉を串焼きにして食べていた。

正直、肉は嫌いだったし品種改良されていない野生動物の肉は非常に臭く食べ辛かった。

他にも川魚や、木の実等も一応採集してはいるのだが、加工をしないで食べられるものは限られるし、狼獣人達は狩りが得意だからあまり採集に熱心では無かったのだ。

最初はどんぐりでも何でもいいから他のものだけで、生活できないか模索したが、結局肉を主食にする以外無かった。

よく、異世界に行った主人公が現地の人と同じ果物や木の実を食っているから、僕もその感覚で食べてみた。それからしばらくして激しい嘔吐と下痢をして、生死の境を彷徨う羽目になった。

植物は大なり小なり何らかの毒性があるので、それは一般の野菜の言えることらしい。大根の辛味成分も一種の毒だし、玉ねぎは

猫が食べれば中毒を起こす。

つまり、なにが言いたいのかといえば、異世界で一番安全な食料は沸かした水と焼いた肉ということだ。植物は恐らく僕も食べられるものがあるはずだが、毎回食事の時に人体実験するのはたまらないので、現在調査中だ。少なくとも現地の人が食べているからと言って安心して果物や木の実を食べてはいけないことを学んだ。

その後、僕は焼いた肉だけをひたすら食べ続けるはめになったのだが、ここで一つ問題があった。

それは、ビタミンとミネラルの不足である。ビタミンとミネラルは新鮮な生肉や生魚、野菜や果物に含まれている。しかし、焼肉にはそれが圧倒的に足りなかった。

おかげで一ヶ月して見事に壊血病の症状が出た。歯茎からの出血と貧血のような症状だ。

さすがの僕も、もう助からないかもしれないと覚悟したのだが、そんな時ある村人が病気に効くと云う果物を差し入れてくれた。

なんとそれは、柿だった！

味は、やや渋い野性的な味だったがお腹も下さずに食べることが出来た。

丁度、季節が秋になっていたのが幸いした。これが他の季節だったら確実に壊血病で死んでいたと思う。

しかし、柿の実も秋が終わればもう食べられなくなる。そうなれ

ば、また生死の境を彷徨うはめになる。なので僕はその村人に柿の実を採った場所を教えてもらい、あるものを採集しに行ったのだ。

それは、柿の葉っぱだった。柿の葉はビタミンCが鬼のように入って、壊血病に非常に有効だった。それに、他のビタミン類も豊富で必要量には足りないが、肉とその他何とか食べられる草を数種類だけ見つけて、肉食をメインに生活することになったのだった。

柿の葉は、平べったい石を使った磨臼を作って粉にして飲んだ。とても渋くて胃がムカムカしたが、なんとか飲み下すことができた。

そして、もう一つの不足栄養素であるミネラルについては、相変わらず不足気味だった。カルシウムなどは、骨を焼いて粉末にしたものを飲んで凌いでいたが、他は完全に不足していた。

人間にとって、ミネラルは大変重要な栄養素である。不足すれば最悪の場合死ぬことすらあるのだ。

こちらに来て直ぐにその事に気づいて、たまたま持っていたサプリメントを制限して飲んでいたけれど、これもいつ無くなるか分からなかった。

史郎は言葉がしゃべれるようになってから、必死で塩を手に入れたようにした。

恐らく、この世界の塩はあちらの世界の機械で取り出したナトリウムだけの塩などではなく、様々なミネラルが豊富な物が出回っているはずだ。

海水から造った塩でもいい、岩塩でもいい、塩湖の塩でもいい、

どれでもいいから見つけなければまずい。

しかし、この村では結局塩を手に入れることはできず、史郎は塩を手に入れる手段を必死で考えることになったのだった。

☆

一年間朝夕黙々とお肉を食べていたら、アウトドア的な生活と相俟ってボディーが滅茶苦茶引き締まって、今流行の細マッチョに成った！

まあ、いくらマッチョになっても、ここではこのぐらいの筋肉は全然自慢にならないのだが・・・。

だって、獣人の人たちって雄雌関係なく全身筋肉が均等について滅茶苦茶かつこいいんだぜ！！

しかも、身長が2mとかざらだし。僕なんて166センチしか無いのに（涙）

まあ、そんな訳で今日もせっせと今日の夕飯分と明日の朝の分を集めないといけない。

森に入ると、また野生動物に狙われるかもしれないから、大声を出して村人に聞こえる距離の範囲で、薪拾いをしてるんだけど。

「それにしても、よく落ちてるなあ」

恐らく、僕以外に薪を使ってる奴が居ないからなんだろうけど、薪用の適度な枯れ枝や着火に使う枯れ草や落ち葉が、持ってけと言わんばかりに落ちているのだ。

おかげで、一年間毎日ごはんに有り付くことが出来ます！感謝感謝。

「そう言えば、さっき精霊がナイフに宿るって言ってたけど精霊ってマジで居るのかな？」

実は、史郎自身は精霊の存在に対して懐疑的であった。

別に「霊現象は全てプラズマが原因です！！」って言ってる感じの先生みたいに、全否定はしていないが、そもそも見たことが無いからなんとも言えないのだ。

日本に居た時にですら、霊現象に遭ったことすら無かった靈感ゼロな史郎だったが、この世界に不思議な存在があることはなんとなく理解していた。

そもそも、史郎が居候している家の家主の”ろうや”は、日本と言う陰陽師や神官あるいは神主のような感じの仕事をしていた。

初めは、原始的な村にある一種の呪術師シャーマンのようなものだろうと思っていたのだが、どうやら違ったらしい。

史郎が村に来て、半年ほどはよく熱を出して寝こむことがあった。

恐らく、この世界の未知の細菌やウイルスが感染したことによる、風邪のひどいバージョンだったのだが、その時”ろうや”が不

思議な力を使ったのである。

まず、聖なる泉から汲んで来た水を飲ませ、そしてその後に”ろうや”が史郎に手をかざし何かを唱え始めた。

初めは「うへえ・・・呪いまじないかよ・・・マジ医者とか居ないのかよ・・・」とか思いつつ見ていたんだけど、”ろうや”が手をかざすと自然と体から熱がとれて、ついでに発熱で痛かった体の節々も、みるみるうちに良くなっていった。

あまりのことに、しばらく言葉が出なかった。

”ろうや”に気分を聞かれて、ようやく自分の身に起きたことが理解できた。

所謂ファンタジーで云う処の治癒魔法の様な物だった。

ただし、これは魔力ではなくて聖なる泉の水を体中に巡らせて、精霊の力の残滓みたいなもので体の中を浄化するものらしいが、詳しいことはよく分からない。

獣人たちも、使っているのにその基本原理は知らないようだ。

要は、昔からこうすると体が楽になるだとか、傷の治りが早くなるだとか経験則から導きだされた方法らしい。

なんか、漢方薬みたいだなと聞いた時思った。

そんな訳で、精霊の力は信じるけど精霊そのものは見たことは無いから疑わしいと思っているだけなのだ。

などと、色んなことを考えている内に両腕いっぱい
の薪が手に入ったので、そろそろ家路に付くことにした。

「そうだ、夕飯の時にあのナイフで肉捌こう」

そう言いながら、史郎は村へと戻っていったのだった。

村に帰ると、丁度ろうやも縄張りの見回りから戻ってきたらしい。

「ろうや、おかえり」

「お、今日もいっぱい採れたみたいだな」

「うへへ、大収穫です」

「さて、早く帰って飯にするぞ」

「うん！」

二人並んで、家に帰ると早速史郎は今日出来たばかりのナイフで肉を捌き始めた。

「どうどう？ なかなかの切れ味でしょう」

「うーん、たしかに俺たちの爪と同じぐらいに良い切れ味だ」

「これは僕の爪だよ」

「なるほど、確かにな」

話しながら、肉を適当な大きさに切った史郎は予め準備しておいた火起しの道具を取り出した。

道具は長い木の棒に弓矢の弓が弦と絡めて付いていて、下に三角形の切れ込みと円形の穴が開いた板が置いてある。

長い棒の先には、丸い円盤型の木が嵌めこまれていて、それが回転したときに遠心力を生み出して、よりスムーズに火起しをできるようにしてある。

そしてさらに、長い棒の先端には、柔らかい木が埋め込まれていて下に置かれた板と擦り合わせた時に、上手く木くずが出るようになっていた。

「それにしても、人間は器用だな。俺たちは棒を手でひたすら錐揉みして着けていたんだが」

「それは、人間だと正直キツイ。獣人なら力も体力もあるから、それでもいいかもしれないけど」

「いや、俺達でも疲れるぞ。だからいちいち火なんて起こさないんだ」

「『ライター』とか、『マッチ』とかがあればもしかしたらみんなも火を使うようになるかな?」

「『ライター』や『マッチ』が何かは知らないが、恐らく普及しないだろう。我々には必要ないのだ」

「そっか・・・」

そんな話をしながら、勢い良く火起し器を使いこなす史郎の姿はすっかり縄文人のような感じだった。

しばらくして、火種が出来たようで蒲に似た植物の穂を乾燥したものに入種を入れて、息を吹きかけた後今度はそれを片手に持つと思いつきり腕を回転させ始めた。

すると、「ボッ！」と云う音と共に、炎が上がった。

「最近、着けるのが早いな。前はかなりの時間がかかっていたのに」

「そりゃあ、毎日朝夕やってれば誰だってうまくなるよ。さくで飯だ飯だ！」

こうして、今日も史郎は焼いたお肉に有り付くことが出来たのだった。

夕餉（後書き）

こんな、ただ薪集めて火を起こして夕飯食べる小説を最後まで読んでいただき、ありがとうございます！！

誤字脱字、ご意見ご感想、何でも結構ですので書き込み待ってます！

【雑談枠】壊血病について（前書き）

ここでは、全話のお話に出てきた中から一部を取り上げて紹介するコーナーです。

見なくても、問題ないのでお暇な方はどうぞ。

【雑談枠】壊血病について

史郎..こんばんにちは

ろうや..なんだその挨拶は...

史郎..いや、マルチ対応挨拶ですがなにか？

ろうや...なんでもない。

史郎..変なろうや。さて、じゃあ今日のお題を発表するね。

ろうや..おう、今日のお題はなんだ？

史郎..今日のお題は『壊血病』だね。

ろうや..ああ、あの作者がすっかり存在を忘れてたやつか。

史郎..そうそう、設定変えたのにすっかり忘れて俺のこと殺そうとしやがったやつだよ^^

ろうや..史郎、目が笑ってないぞ...

史郎..当たり前じゃん。マジで死にかけたんだから。

ろうや...まあいい、そもそも壊血病って何なんだ？

史郎..壊血病とはビタミンCの欠乏により起こる病気だね。昔は船乗りの病気として、恐れられたんだよ。

ろうや…船乗りの病気か。

史郎…そう、大航海時代に船が遠洋航海をするようになってから急速に問題化し始めて、その後長い間船乗りたちを苦しめたんだ。

ろうや…なるほど。で、今回は肉食が原因だったんだな。

史郎…うん。そもそも壊血病は新鮮な食品を食べることによって得ることができるビタミンが不足して起こる病気なんだ。

ろうや…ふむふむ、しかし作者はなんでそんな事忘れてたんだ？結構大事なことだろう？

史郎…言い訳を言えば、船乗りの病気って事に囚われ過ぎてたのが原因だろうね。後は、単純に作者が馬鹿だからかな。

ろうや…。。まあそれは置いておいて、壊血病の対策はどんなのがあるんだ？

史郎…一番簡単なのは、新鮮な野菜を食べさせるか。生肉を食べさせるのが一番だね。

ろうや…なるほど、だから俺らは壊血病にならなかったんだな。

史郎…そういうこと。それで大航海時代はどうしていたかと言えば、具体的な対策として記録に残っているのは、キャプテン・クックの有名なだね。彼はキャベツの酢漬け、所謂漬物を船員に食べるように義務付けたんだ。

ろうや…キャベツの酢漬けか。なんかヨーロッパ的じゃないもんだな。

史郎…なんでも中東経由でヨーロッパに入ってきた食品らしい。元をたどれば恐らく東南アジアあたりのものじゃないかな？

ろうや…で、他にはなにか対策をとったのか？

史郎…その後も結局キャベツの酢漬けは流行ることはなく、壊血病が蔓延したけど英国海軍が後に、ライムの絞り汁を飲むことによって問題を解決したらしい。だから今でも、英国海軍をライミー野郎って云う言葉が残っているんだ。

ろうや…なるほどな。そう言えば日本や東洋ではどうだったんだ。

史郎…実はこれについては記録が残っていないくて、推測でしか無いんだけど中国明の時代の鄭和の大艦隊は今のアフリカあたりまで行ったらしいけど、恐らくお茶のおかげで壊血病を予防できたんじゃないかと思うんだ。

ろうや…お茶？

史郎…そう、お茶ね。お茶は御存知の通りビタミンCが豊富だから、壊血病予防にも有効だったみたいよ。まあ、鄭和の場合陸地の見える範囲で航海をしていたっていう記録もあるから、実際は壊血病になる前にそこに寄港したりして、新鮮な食料を得ていた可能性もある。あと、船に畑を作って作物を育てていたって記述もあるから、そこの所は不明なんだよね。

ろうや…ふむ。じゃあ日本の場合はどうなんだ？

史郎…日本の場合漂流者が壊血病になった記録は多数記録されているんだけど、そもそも遠洋航海をすることが無かったから、実際に船に乗っていて、なった記録って見当たらないんだ。

ろうや…お国が違えば、事情も違うのか。そう言えば、今回作者は柿の葉を対策に使ったけど、あれは正しいのか？

史郎…柿の葉のアイディアは、元々壊血病になった時用に温めていたネタだったからね。柿の葉はビタミンCが、レモンや緑茶の20倍も含まれているんだ。柿の実事態も、昔から『柿が赤くなると医者が青くなる』って、言わてるくらい栄養があるものだから。あれを食べれば壊血病は問題ないと思う。

ろうや…なるほど、だから急遽物語の中に柿の木を出したんだな。

史郎…それ以外に、壊血病対策を思いつかなかったんだよ。一応フラグで、植生は日本と異世界の折衷で、書いてあるから書けた裏技だけだねw

ろうや…それで、これからはどうするんだ？

史郎…今主人公は柿の葉を使って色々書く作中だからこれ以上はノーコメントで。

ろうや…そうか、まあ取り敢えずこの問題は解決したってことだな。

史郎…今のところ問題は無いと思う。後は読者さんの指摘待ちかな。

ろうや…それではみなさま、拙い文章を読んでいただきありがとうございます

ございました。

史郎…これからも、精進していきますので、僕達の冒険応援してね
！！それじゃあさいならー！！

【雑談枠】壊血病について（後書き）

この度は r y o u 氏にご指摘いただいた、壊血病についての記述とその対策を軽く書くことで解説とさせて頂きました。

こういった皆様の意見は、大変貴重ですので、これからもどんどんご意見ご感想お願いいたします。

最後までお読みいただきありがとうございました。 m (_ _) m

失敗（前書き）

取り敢えず、異世界に來たんだからハラハラしたアクションを！！
等と思って書いてみました。

ただし、私のクオリティーだとこれが限界ですorz

失敗

火事

食事を終えた、二人は早速寝る準備を始めた。

この世界では、特に娯楽も無く狩猟採集民の彼らは、農耕民のように夜まで作業関係の仕事をする必要もないので、夕陽が沈むと直ちに、皆眠りに付くのだった。

史郎も、寝る準備をするため外に設けられていた竈もどき（簡易竈）の火を消して寝る準備をしていた。

こちらのでは、囲炉裏が一応あるのだが史郎以外はそもそも火を使わないし中で焚くと煙いので、外に石積みの竈もどき（簡易竈）を設置したのだった。

燃えさしは、火の着きが良いので朝食の時に使うためそのまま竈もどき（簡易竈）の中に入れておく。

勿論火災にならないように、ちゃんと火が消えたことを確認して、寝る準備を始めた。

「さうて、寝ますか。明日はなにをしようかなあ」

そんなどうでも良い事を考えながら、部屋の隅から干し草と、動物の毛皮を二枚取り出して、一枚は干し草の上に敷き、もう一枚は掛け布団のようにして眠りについた。

「おやすみ、ろうや」

「ああ、おやすみ史郎」

こうして、今日も無事一日が終わろうとしていたのだった。

深夜

風の音で目が覚めた、どうやら外では風が吹き荒れているようだ。

僕も、まだこちらに来て一年ほどこ経っていないので詳しくないのだが、こういった嵐のような風は春先に、よく吹くらしい。

今年の冬は、雪が降ることは無かったが、“ろうや”に聞くと雪自体は降るらしいので、ここは温帯なのではと思っている。根雪もないし、話的には雨季も乾季も無さそうだから、たぶん合っているはずだ。

ただ、真夏や真冬があまり変化がなかったのもその点は、大変に助かった。

これが熱帯や亜寒帯だったらやばかった。恐らく僕のような現代人的ひよっこは、速攻寒さや暑さで死んでいただろう。（リアルな意味で）

今外で吹いているのが、春の嵐的なものならば、案外こちらの世界と日本の気候は似通っているのかもしれない。

ただし、この場所は南半球のようだから、日本とは違うのかもしれないが。

こちらに飛ばされて来た時、季節は秋の終わりごろだった筈だ。しかし、こっちに來てしばらくして、夏が來たのだ。

季節は冬の筈なのにどうしてだ！？と、思い突然頭の中に海パン一丁でサーフィンするサンタの画像が思い出されて、気分が悪くなった。

あれは、下手なブラクラよりよっぽどなにか來るものがある・・・。

そう、よく学校の社会や地理の教科書に載っていた『夏に來るサンタさん』の写真だ。

ご存知のように、地球では北半球と南半球では四季が違ふ。なので、恐らく僕はこの惑星の南半球に飛ばされたのではないかと推測したのだ。ただし、時間軸がずれていないことが前提なのだが、これは正直解らなかった。

後で意識して影を見たりした結果、影が反時計回りに巡っていることが分かったので、南半球だと確信した。

時計は、なぜ右回りなのか。それは今の機械式の時計よりはるか昔に作られた、日時計に由来している。

当時日時計を開発した文明はいつか在ったらしいが、そのどれもが北半球にあった。

北半球では影が右回りで動くので、結局時計の針は右回りに成ったのだ。

そんな訳で、取り敢えず温暖で四季の変化が緩やかな南半球に自分は今居るらしい。

などと、ぼんやりと考えているとなんだか周りの様子がおかしい。

風でいろんな音が聞こえたり、隙間から入ってきて顔に風が当たるので、最初は解らなかったのだが・・・。

「焦げ臭い？」

まさか！と思い、慌てて布団から起きると家の壁から小さな炎が上がっていた。

まずい！恐らく燃えさしが強風に煽られて、再び火がついたのだろう。けど大丈夫、まだあれぐらいなら、消せるはずだ。

「どうした、史ろ・・・？焦げ臭いな」

横で寝ていた、”ろうや”も僕が起きたのに気づいて体を起こして鼻をヒクヒクさせている。

その姿に思わず『かわええ！！』などと思ったりしながら、史郎は革の布団で壁を叩き始めた。

火は一瞬消えたように見えたが、次の瞬間今度は壁一面の隙間から炎が見え始めた。

「やばい！！完全に火事だ！逃げよう、ろうや！」

「ちよつとまで、なにがどうな『いいから早く！！』」

いまだ、半分夢のなかの住人だったろうやの発言に、被せるような大声を上げて、史郎はこちらに落ちてきた時に身に着けていた鞆と、”ろうや”が大切にしていた祭祀の道具を持って急いで家を出た。

家を出ると、そこには真っ赤な炎が強風に煽られて立ちのぼっていた。

「ああ・・・、駄目だこれは・・・」

「家がぁ・・・」

もはや手遅れと判断して半ば放心状態で眺めている史郎と、突然のことに頭が回らない”ろうや”の二人は、ただただ燃え盛る家を眺めていたのだった。

失敗（後書き）

何時も、最期まで読んでいただきありがとうございます！！

これからも、なるべく更新しますので、よろしくお願い致します

！！

再建（前書き）

前回お家が燃えちゃったので、再建します。
たぶん、今回も冒険も何も無いです。

7月29日石斧をハンドアックスに変えました。
さらに、洋服の設定を追加

再建

住居

あの後、幸いなことに火災はすぐに収まった。

隣家が離れていたこともあり、風向きも味方して他の住居には燃え広がらなかった。

騒ぎを聞きつけた村人たちが、起きてきてしばしその光景を眺めていた。彼らにはどうすることも出来なかった。

ほとんど火災の経験がなく、またあまりに火の勢いが激しすぎたのだ。このままだとまずいと思った史郎は、“ろうや”に火の粉による延焼を防ぐ対策を村人に教えるようお願いした。

取り敢えず消火は無理だから家は諦めて、周りに住宅に飛んだ火の粉を砂や土をかけて消すことや、万が一火の粉が着いた場合、素早くその部分の茅を取るなどを指示した。

☆

「ごめんなさい・・・」

「仕方がない、もう過ぎたことだ。」

史郎達は、“ろう”の家に來ていた。“ろう”の家族は数年前に

流行病と狩りで命を落として、今は”ろう”一人だけで生活をしていたので、取り敢えず転がり込んだのだ。

”ろう”も、突然転がり込んできたのに嫌な顔をせず、むしろ「家族が増えて嬉しい」と言っていてさえた。

燃えて無くなった生活用具も、村人が持ち寄ってくれて、あつという間に前の生活と同じだけ生活できるようになった。

そもそも、生活水準が石器時代と同じか少し進んだぐらいの生活だから要る道具なんてほとんど無かったのだ。

必要なものと言えば、”ろうや”の祭祀用の道具ぐらいだ。

てか、ぶっちゃけ貰ったものは、史郎が使う布団替わりの毛皮だけだったのだ。

そうそう、ここで『洋服は?』と思った方がいるかも知れないがここではだれも洋服など来ていない!!

なにせ、全員獣人なのだから隠す必要がないのだ。大事なところはもさもさの毛皮に隠れて見えないし、防寒目的にも必要ないので彼らは洋服は身につけてはいなかった。

最初は、その光景にかなり落ち着かなく（特にプロポーション抜群な雌の方々にはかなりこまってしまった）が、毎日銭湯に通っていると知っているイメージで想像してもらえばわかると思うが、人間は案外慣れるものである。

ただ、だからといって僕まで裸になるのは流石に勘弁なので、こ

つちに來た時の洋服を一張羅に頑張っていた。

家が完成したら、そろそろ洋服も作りたいなあ……。

そう思いながら、取り敢えず三人で明け方までの短い時間、眠りに付くのだった。

☆

「あ、『手斧』なんて在ったんだ」

「あ、これの事か？こいつは木を切る時に使う。流石に俺たちの爪では、太い木は倒せないからな」

そう言つて、史郎の隣にいる獸人は手に持っている石器を見せてくれた。

加工はほとんどしておらず、石を適当な大きさに叩いて加工した所謂ハンドアックスと呼ばれるタイプの石器だった。

史郎は、今”ろうや”と別れて村人と一緒に森に入って、住宅の再建に必要な資材を集めていた。

”ろうや”は、祭祀と縄張りの警戒があるので住宅の再建に時間が割けないのだ。

今、史郎の隣にいるのは、村で史郎のことを可愛がってくれてい

る、” ろうえ” さんだ。

彼は、村の中でも狩りが上手く、また人望もある人なので若くして村の相談役みたいなことをやっている、所謂若者衆の中心的なメンバーだ。

史郎が村で認められたのは、” ろうや” と、この彼のおかげなのだ。

そんな、” ろうえ” さんと一緒に史郎は栗の木を探していた。

栗の木は、日本でも古くから住宅の建材として使われていた。

古くは縄文時代から、竪穴式住居に使われていた。石斧で比較的簡単に切り倒せて、しかも丈夫な栗の木は、この世界でもご多忙に漏れず有用な植物らしい。

「今日は、本当に有難うございます。わざわざ狩りを休んでまで来ていただいたて」

「なあに、困った時はお互い様だしな。それに狩りは俺らが居なくても問題ないしな」

「ありがとう、ろうえさん」

「子供が困ってたら、助けるのが大人の役目だからな♪」

「僕は子供じゃないですよ!」

「お、一丁前に言うねえ。」

「もく、ろうえさんたらく！」

そんな話をしながら、史郎と”ろうえ”は丁度いい大きさの柱に使う栗の木を見つけた。

「お、これなんか良さそうだな」

そう言つて、”ろうえ”は木をひとしきり眺めた後、手で軽く叩いて、そして手斧を振るい始めた。

最初は、あんな物でどうやって木を切り倒せるのだろうか心配していた史郎だったが、その豪快な腕使いで振るわれる手斧に、史郎はただただ呆然として見ているしか無かった。

栗の木は手斧が振り下ろされると、激しく揺れていた。石斧の刃先から木くずが、ボロボロとこぼれ落ちていった。

そして、10分ほどすると栗の木はパキパキつと云う音をさせたかと思うと、ドスン！と云う音と共に倒れたのだった。

「よし、一丁あがり！」

あまりの手際の良さに、感動していた史郎だったが我に帰って、村人の輪に入って一生懸命木を運び出す作業に参加したのだった。

再建（後書き）

暑くて、執筆スピードダウン。
明日辺りには、もう少し長い文章書きたいと思います。

建築（前書き）

相変わらず短いです^^；
住宅再建編です。

建築

村に着くと、丸太の加工が始まった。

丸太は、適当な長さに切り揃えられ、皮を剥かれた。

そして、丸太が揃うと今度は村の近くの草原に生えている茅を取りに行った。

季節が冬の終わりで幸いした。茅は一冬超えた物がよく乾いて使いやすいのだ。日本の古い民家の屋根に使う茅葺屋根にも使われる茅だが、これは主にスキの事を指す。適度に油分があり雨を弾くので、昔から使われていて縄文人もよく使っていたらしい。

その反面、油分が多く火がつきやすいので火災に弱い側面がある。

「そう言えば、茅はどうやって刈り取るんですか？」

「ああ、俺たちはこうやってやるんだ」

そう言って、”ろうえ”は手近にあった茅を掴んでその根元あたりを爪で『シュッ!』と引っ掻いた。

見事に茅は断ち切られている。

「・・・なんかオレも爪が欲しくなった・・・」

「まあ、便利だからな」

そんな、半ば力技を使いながら、”ろうえ”とその仲間たち数人

でテキパキと茅を集めると村へ運び始めた。史郎は黒曜石のナイフで必死に茅を刈るが、”ろうえ”達獣人ほどのペースは出せなかった。

そして、ある程度茅を集めると村に運び、いよいよ家の再建に取り掛かった。

その時、史郎は前々から思っていた案を実行するために、”ろうえ”達に相談することにした。

「あのー」

「うん？どうした」

「実は、家を建ててもらって恐縮なのですが、ちょっと工夫をしてみたくて」

「どんなふうなんだ？」

「はい、実はもう少し家を深く掘って戴きたいんです」

「家の床をか？」

「はい、今は大体皆さんの手首から肘ぐらいまでの深さですがそれよりも、もう少し深くしていただきたいんです。」

「うーん、穴を掘るのはかなりの手間だからな。」

「実は、そう思って前々から作っておいた物があるんです」

そう言って、史郎は木で出来た何種類かの道具を取り出して”ろ
うえ”達に渡した。

「これは？」

「これはスコップと、鍬と云う道具です。本当なら先に金属の刃を
着けるのですが、ここの地面は柔らかいので木製の道具でも恐らく
大丈夫かと」

「どうやって使うんだ？」

「えっと、まず鍬で地面を耕してそれで柔らかくなった所をスコッ
プで掬います。掬った土は穴の周りに積んで、雨水の侵入を防ぎま
す。」

「ふむ・・・、取り敢えずやってみるか。」

「よろしくお願いします。」

そう言って、史郎達は道具を持って豎穴式住居のおよそ六畳半ぐ
らいの大きさの穴の中に入っていった。

穴の周りには、予め排水路の役割をする溝が穴の周りに掘られて
いるので、その溝を埋めないように溝と穴の間に土を持っていくの
だ。

穴は、現在約20～30cm程掘られているのでここから、獣人
たちの腰のあたりまで掘ることにした。大体1m弱ぐらい掘ること
になる。

ザク・ザク・ザク

何処か、懐かしい音を響かせながら木製の鍬やスコップを振るう
獣人達はとても生き生きしていた。

「すげえな、土がサクサク掘れてくぜ」

「ああ、今まで掘るのに手でひたすら掻き出してたけど、これなら
簡単に掘れるな」

木製の道具は、予想以上に土を掘ることに成功していた。金属の
刃がない分、一度に深くは掘れないが、獣人たちの力と相まってか
なりスムーズに穴が掘れている。

「それにしても、よく火事で燃えなかったな。」

「それは、この道具を乾かすために冬の間に自然乾燥させていたんです。
」

「乾かす？なんでだ？」

「えっと、木材って本当は切って直ぐに使うと水分が残っていて変
形したり、腐ったり、虫がついたりして寿命が短くなるんです。だ
から乾燥させて、水分を十分に抜いてから使うのがいいんです」

「そうなのか、じゃあ家の柱も乾かしたほうがいいんじゃないか？」

「そうしたいんですが、その場合大体30日ほど水に沈めてから更
に一年程天日で乾燥させないといけないので、今からはとても無理
なんです」

「て事は、史郎はこの道具をこちらに来てから直ぐに作り始めたのか」

「はい、言葉を覚える以外に暇だったから地道に石で削って作ってたんです」

「人間は凄いな。一年もかけて道具を作るなんて」

「僕も、正直道具を作るのは初めてだったんです。」

「それにしても、よく出来てるよ」

「ありがとうございます」

道具の方は、”ろうえ”達に好評だったようだ。この後穴を掘り終わった道具は村の共有物にと、史郎が提案して長老宅で管理されることになった。

元々、村に保護してもらったお礼に道具を作ってプレゼントしようと思っていたので、史郎としては気に入ってもらえて嬉しかった。

更に史郎は、丸太の柱を建てる時、柱の地面に埋める部分を炎で焼いて炭化させ、防腐剤の代わりにしたり、柱を入れる穴に砂利を敷いて柱を入れた後、その穴と柱の間にも砂利を入れるなど幾つかの提案をして、実行した。

「史郎はどうやってこんな事を知ったんだ？確かに史郎のやっていることは話を聞くと理にかなっている」

「うゝん『本』で読んだことがあるんです」

「『本』？」

「『文字』がここには無いんだった。えっと様々な事を知っている人が『文字』と言う物を使って、情報を他者に一度に伝えるものが本です。」

「ふむ、なんだか面白そうだな。なあ俺たちにも『文字』を教えてくださいませんか？」

「『文字』をですか？」

「ああ、俺たちは昔のことや知っていることは全部口伝えで伝えてきた。だけどそれだけだとやっぱり色々と不便でな。知っている奴が狩りで死んだり、間違って伝えちまったりしてよく解なくなっちゃまった伝承とかもあるから、もし文字が使えたら便利なんじゃないかと思ってな」

「わかりました。じゃあ明日辺りから『文字』と一緒に、僕の国の言葉も教えます。元々僕の使える文字は、僕の国の言葉用なので併せて覚えた方がたぶんよくわかると思いますので。」

「ああ、それじゃあよろしく頼む」

「はい」

そんな会話を”ろうえ”としながら、作業はどんどん進んで行き、太陽が沈む前に茅を吹き終わり家が完成した。

「ふう、なんか一日で出来たな」

「本当にありがとうございました」

「なに、困った時はお互い様だろ。それじゃあ俺たちは帰るぞ。またな」

「お疲れ様でした！」

獣人達は各々自分たちの家に帰っていった。

「さて、中を片付けなくちゃ」

作業で出た細かいゴミを片付けて。”ろう”の家から荷物を運び込むと、”丁度””ろうや”が家に帰って来た。その手には、今日の取り分の肉がしっかりと握られていた。

「あ、ろうや。おかえりなさい」

「ただいま、史郎」

「どうどう？新しい家は？」

「ああ、天井が前より高くていいな。前は少し屈んで生活しなきゃならなかったが、これはいいな」

「やっぱ、不便だったんだ。なんか僕には丁度いいサイズの家だったけど、ろうや達は大きいから狭いんじゃないかなって前から思ってた、今回思い切って家を深く掘ってみたの」

「なるほど、屋根を上げるのはなかなか難しいけど、床を掘るだけなら柱をその分高くするだけで良いからか」

「うん、それとこれも作っただ」

「これは？」

史郎が”ろうや”に見せたのは、壁際に設置された穴のようなものだった。

「これはね、竈って言うんだ。壁に穴を掘って煙の通りの煙突を付けたから、これで家の中で煮炊きしても煙くならないよ。流石に火事になるのは懲り懲りだから」

「なるほど、確かにまた火事になられたら困るな」

「うん・・・、ごめんね本当に・・・」

「気にするな、過ぎたことはもういいから。」

「うん、ありがとう・・・」

”ろうや”は、史郎の頭を優しく撫でた。ろうやにとって史郎は子供にしか見えない。だからついこうして落ち込む史郎を撫でてしまった。

「ろうや、僕子供じゃないんだよ。」

「なにを言ってる、お前はまだ狩りができないのだから子供だろ？」

「もう・・・」

抗議の声を上げながらも、
”ろうや”
の撫でられるのにまんざら
でもなさそうな史郎だった。

建築（後書き）

お読みいただき誠にありがとうございます。

なんか、この先の展開にかなり迷いが出ています。

正直、そろそろ冒険的なものが書きたいのですが、作者的に書く技量が・・・。

寄り合い（前書き）

お久しぶりです。少々間が開きましたがなんとか更新できました。
今後は、ストーリーをちよつと冒険ものに切り替えるかえるかも・
・。

寄り合い

沙汰

史郎は、昨日から眠れずにいた。今日は村に来て最初の春の寄り合いの日だ。

寄り合いは、通常定期的に村での問題などを話しあって決める一種の話し合いの場なのだが、小さな村にとって寄り合いで決定されたことは絶対で、通常覆すことはできないのだ。

史郎は、初め村に来た時その処遇を巡って寄り合いで一悶着あったのだ。

彼らからしてみれば、村に訳もわからない人間を迎え入れるなど到底受け入れられるものではない、拾ってきた”ろうや”ですら史郎がどうなるか予想がつかなかった。

しかし、発見された場所が山神様の祠だった事と、史郎の見た目が幼かったことが幸いした。

山神様の祠は、代々村の人々が信仰している聖地で、通常結界が張られていて一族を害するものは、あの祠には入ることができないようになっている。

故に史郎は一族に害はないと判断された。

その次に、史郎の年齢だ。史郎はこちらに来た時年齢を名乗らなかった。なので見た目で皆判断したのだが、どう考えても数えで十

二は超えていないだろうと皆の意見は一致した。

数え七つ迄なら神の子として、山へ返す（この場合食料と水を持たせて山に放置する事）ことも出来たが十を超えているようなのでそれもできない。かと云って成人として村から追い出すこともできない。この村では基本的に狩りで獲物を取れるようになったら成人であるが、雌の場合はその限りではなく初潮が来たらである。

ただし、一応狩りが出来なくても大体15で取り敢えず『子供ではない』状態になるのだ。それが大体数え15である。

喧々諤々の議論の末出された結論は、一年間”ろうや”に預けるというものだった。つまり問題を先送りにしたのだ。

小さな村では、些細な争いことから厄介な事態が発展することがあるので、こう云った事態の場合取り敢えず問題を保留して、何かあれば対処するのが暗黙の了解となっていたのだ。

そして、もし預かり期間中にトラブルを起せば勿論史郎を処分する大義名分ができるわけで、その点で言えば一年間の保留はある意味粗探しの様な物だった。

そして、今日。いよいよ史郎の処遇を決める大事な寄り合いが始まるのだった。

☆

寄り合いは、日の出前に村の主だった人々が山神様の祠に参拝し

て一年の無事と冬を越せたことを感謝することから始まる。その後
に、村の長の家^{おさ}に皆で集まり話し合うのだ。

そして、結論が出ると村長と”ろうや”が山神様の祠に参って結
果を報告するのが習わしになっている。

勿論、未だ正式な村の一員ではない史郎は寄り合いに参加できな
い。そして村の子供達も当然大人の話し合いである寄り合いには参
加できないので、今は村の中では子供たちが大勢ではしゃいでいる
のだった。

「史郎兄ちゃん！これな何？」

「ああ、これはね。水車って言ってね、水の力を利用して仕事をさ
せる機械なんだよ」

「すげえー！！そんな事ができるんだ！」

「うん、こっちには魔法みたいな便利なものがあるからあんまり必
要ないかもしれないけどね」

「そんな事無いぜ、魔法は使える奴に限られてるし、何よりそんな
ことに使わないからな普通は」

「貴重な魔法が使える人に、誰でもできる水汲みをさせるなんて考
えないか」

今、史郎は村の広場で”ろう”にせがまれて向こうの世界の話をして
いたのだった。”ろう”の他にも何人かの子供たちが来て居て、
史郎の近くで皆異世界の話に夢中になっていた。

「ねえ、あっちの世界は兄ちゃんみたい人間がいっぱいいるの？」

唐突に、近くにいた男の子がそんな出問を投げかけてきた。

「そうだね、僕と同じ感じのが結構いるよ。後は肌の色が違うのか、眼の色が違うのとか色々だけど、その全てが人間だね」

「ふうん。じゃあ俺達みたいなのは？」

「わからない。少なくとも僕は見たこともないし。僕の世界では居ないことになってるな」

「そうなんだあ」

史郎は、子供たちとたわいのない話をしながら、今日どんな沙汰がでるか正直気が気でなかった。

史郎自身、今ここで出て行けと言われたら恐らく野垂れ死ぬしか道はないだろう。

それほど、この世界は厳しい世界なのだ。史郎が生きた現代なら、追放されてもどうにかなるだろうが、ここは違う。追放されるのが死に直結する世界なのだ。

そんな訳で、先日の火災はかなり不味かったのではないかと史郎は思っている。

一応、延焼がなかったので特に咎め立てされることは無かったが、恐らく史郎のことをよく思っていない人たちには、格好の批判材料

になるはずだ。

だから、史郎はコツコツと村に受け入れられるように必死に好かれるように努力を重ねてきた。

挨拶もそうだし、子供たちに様々な遊びを教えたりして人気を得たり、雌に混じってせっせと情報収集をしたりして、なんとか村に残れるように頑張っていたのだ。

「史郎」

「ろうや・・・、寄り合いは終わったの？」

「いや、少々厄介なことになってな・・・」

「厄介なこと？」

一瞬、史郎の脳裏に浮かんだ処分の二文字を必死で脳内から振り払い、史郎は”ろうや”に先を促した。

「ああ、それがお前のことなんだが・・・、ちょっと寄り合いに来てもらうことになった」

「寄り合いに？」

「ああ、とりあえず一緒に来てくれ」

そう言っ”て”ろうや”は、踵を返すと史郎に着いて来るように言っ”て”一村長『むらおさ』の家に向かうのだった。

☆

村長の家に着くと、村の主だった人々が顔を揃えていた。勿論その中に”ろうえ”の姿もあった。彼は村の若衆の代表として、寄り合いに出ているようだ。

「史郎よ、久しいな」

「村長、お久しぶりです」

史郎に、最初に話しかけてきたのは村長の”ろうき”さんだ。彼は村で一番の年寄りで”ろうや”のお祖父さんの頃から村にいたらしい。

「うむ。実はな、ちとおぬしに聞きたいことがあってな。」

「聞きたいことでございますか？」

「そうじゃ、これのことなんじゃがな」

そう云って、村長が指し示したのは先日史郎が村に寄贈した、道具だった。

鋤やスコップなど、どれも史郎が作った不恰好な道具たち。

「これは、おぬしが作ったものじゃな」

「はい。あのお・・・この道具が何か・・・」

史郎は、多少ビクビクしながらもこの道具が何か問題でもあったのかと思って問い返した。

「それがな、この道具はなかなか具合がいい。わしらは家を建てる時穴を掘るのじゃが、大体手で土を掘り返して掻き出すのじゃ。しかしそれだとうにも手間がかかる。本当は深く掘ったほうが住心地が良いのは分かっていたのじゃが、今までは手間を惜しんで作らなかった。」

そこで長老は、道具をもう一度指さして「それが、これのおかげで一氣に解決しそうじゃ」と言い出した。

そして史郎に改めて、向き合おうと急に恐いくらい真面目な顔になって史郎に問いかけはじめた。

「なあ史郎や、お前さんは人間のことは憎いか？」

「人間を、憎い？」

「そうじゃ、お前さんをあんな所に置き去りにした人間が憎いか？」

史郎は、困惑した。実は史郎は『異世界から来たのだ』と宣言していたのだが、だれもそれを信じなかったのだ。信じてくれたのは、村の子供達くらいだ。なので史郎は早々に異世界から来たと言う主張を諦めたのだ。

つまり、今の状況は村人たちは史郎が人間たちに捨てられた哀れな子供としか思っていないのだ。そして、どのような答えを求めているか分からないが、今彼らは真剣にその事を問うて来ている。

史郎は、一瞬どうすればいいのか迷いながらも正直に自分の今の気持ちを話し始めて。

「人間は憎くはありません。ただ、人間を好きかと聞かれれば、素直に好きとは言えない気持ちがあります。ここに居る皆さんは、よそ者の僕に本当に良くしてくださいました。だからかもしれないけど、僕は今人間と獣人のどちらが好きかと言われれば、迷わず獣人だと思います。」

そうだ、僕はあっちの世界でもそうだった。人寂しさに人と交わって生活していたが、そのどれもが己の寂しさを紛らわせるためのものだった。相手も同じような気持ちで接していたようで、類は友を呼ぶって感じで何処か寂しくて人恋しいから適当に集まって遊ぶ。そんな感じの交際ばかりだった。

でも、この奴らは違う。嫌なら嫌だとはっきり言い。態度で示してきたけど、その代わり好かれれば、とことん付き合ってくれた。

愛想笑いも無い、建前も本音もない結構日本人的世界に生きている僕にとって厳しい世界だったけど、本気で生きている彼らにはそれが相応しいと思った。

そして、何時からかそんな彼らに惹かれていた自分がいたのだ。

「そうか……。よし分かった」

村長は、僕の言葉に納得したらし。そして周りのみんなに目配せすると周りのみんなも同様に頷いて、何かを納得していた。

「あのお・・・、僕はどのようなのでしょうか？」

緊張と恐怖で、早く結果を聞きたかった史郎は村長に尋ねた。

「うん、決まったぞ。史郎は正式に村人になることが決まった」

「!? 本当ですか！」

「ああ、これからは村の一員じゃ。よかった史郎」

「あ、ありがとうございます！」

史郎は、頭を床に着けるほど下げてその場にいた村人たちに感謝した。周りにいた村人たちもどこか、微笑ましげに史郎を見ていたのだった。

寄り合い（後書き）

暑くて、もうだめです＞＜

取り敢えず、こんな感じで村人に認められた史郎くんですが、たぶんこの後に試練があると思います W

次回を乞うご期待！

勉強（前書き）

更新サボってすみません＞＜
モチベーションがちよつと不安定気味で、
現在プロットを書くか迷
っております^^；

勉強

言語

はれて村人となった史郎だが、これと云ってなにかあるわけでもなく、何時もと変わらない生活を送っているのだった。

しいて変わったと云えば、村の若衆に読み書きと日本語を教えていることぐらいだ。

最初は、どう教えればいいのか分からなかった史郎だったが、元々獣人たちが素直で頭が良かったのが幸いした。筆記用具がないので、晴れた日に地面に字を書いて授業をすると、直ぐに覚えていった。

こちらの言語を音写した文字カタカナと日本語を書いて、それをこちらの言語で意味を解説し日本語を後で発音する。そうして、ある程度日本語の読み書きが出来たら、今度は日本語のみの授業を始める。

江戸時代から明治時代の日本人も、このような感じで英語を学ぶ時全て英語で授業を受けて学んだそうだが、自分もこの世界に落ちてそれが非常に有効な事を気付かされた。

たしかに、不便だし自分の意見が相手に的確に伝わらないのが、もどかしくて辛い事もあったが、どの世界に行っても、二足歩行の生活をしている種族は同じような進化の過程を経たのか、生活習慣や行動に共通の考え方が芽生えているようで、よく観察していればおのずと言葉がなくても分かるようになるのだ。

そして、言語も周りの人間が使っているのを見てみると、なんとなく分かるようになる。

史郎はそうやって、獣人たちの言葉を習得したのだ。だから、今回はそのやり方をそっくりそのまま応用して、獣人達に言葉を覚えてもらおうとしていたのだ。

☆

『史郎先生へ。【hasi】ってどう書くの？』

『どれどれ』

現在僕は、狩りが終わった若者たちを絶賛指導中だ。未だに先生と呼ばれるのはちょっと恥ずかしいけど、みんなが熱心に読み書きしたりディスカッションをしている姿を見るのはとても楽しい。

今はお互いに日本語を書いて、それを読み合うクイズ形式の勉強や、あるテーマを決めて議論する所謂ディスカッション式の授業を中心に勉強を進めている。

みんな今まで全然知らなかったはずの言語なのに、今では僕でも答えることが難しい質問をポンポン出して来て、かなり苦労していたりする。

正直、持ってきた鞆に電子辞書が有って良かった。電池は一応予備もあるし、後一年ぐらいいは持つかもしれない。まあ、電池だけならボルタ電池を自作して何とかできそうだからその点は心配要らない。

いかな。

にわか先生となって、生徒たちの間を飛び回っていると”ろうや”が向こうからやってきた。

「史郎。村長が呼んでいるぞ」

「村長が？分かった、すぐに行く。おい、みんな。ちょっと用事が出来たらか自習な！適当な所で終わらせろよ」

『『うっす！』』

どこか、上の空な一種独特の返事を返した若者たちを後に、史郎は村長の家に向かったのだった。

☆

「村長、史郎です」

「おお、四郎か。入ってくれ」

史郎は、村長の家の入り口で一声掛けると中に入った。

史郎が村長の家に来る事はあまりない。この村に来た時と春の寄り合いの時以来だ。

村長の家も竪穴式住居だが、中で話し合いができるように普通の家よりも若干大きな作りになっていた。

それでも内装はいたってシンプルで、飾り気が無く床に敷かれた豪華な毛皮が唯一この家が普通の家よりも格式がある場所であることを示しているのだった。

「史郎、実はな。おぬしに、ちと行ってもらわねばならぬ場所がある」

「行ってもらう場所ですか？」

「そうじゃ、この村を出て3日ほど行った場所に役人がいる村がある。そこへ貢ぎ物を納めに行くついでに、お主のことを正式な村人として役所に届け出る事にしたのじゃ」

「役所……ですか……」

「気が重いかも知れんが、仕方のないことなんじゃ。他種族が別の村に住むと云うのは珍しいことなんじゃ。むかし異なる種族が村に住むことで色々揉めての、それ以来基本的に同じ種族は同じ場所で生活するのが当たり前になったんじゃ。今はその取決めも無くなったのじゃが、不屈きな輩が居て、悪さをして他種族の村に隠れ住む者も居ってな。そのせいで、他種族が住む場合は役人に御目通りをして、問題がないか調べるようになったんじゃ。だから、すまぬがちと役人に御目通りをして来てはくれぬか」

「分かりました。私事でお手間を取らせてすみません」

「なにを他人行儀な、もうお主はこの村の住人、いわば農らの家族も同然じゃ。そんなに気を使うことはない」

「村長・・・」

「役人も色々聞いてくるだろうが、史郎が捨て人だと判ればそう問い詰められる事も無いだろうさ」

「はい・・・」

その後、史郎は村長と二・三話をする。と村長の家から出ていった。

☆

うゝん、お役人かゝ。大丈夫かなあ・・・。

史郎は、ため息を吐きながら家路に付いていた。そもそもこの世界で生まれたわけではない自分が、うまく役人の尋問をくぐり抜けることができるだろうか？

取り敢えず、出身とかを考えておかないとダメだよな。

そんな事を考えながら、史郎が家の前まで来ると”ろうえ”が家の前に立っていた。

「あれ？ろうえ、どうしたの？何か分からないことでもあった？」

「あ、いやちょっと相談にのってもらいたくてな・・・」

「相談？ろうえが？珍しいね」

取り敢えず史郎は立ち話も何なので”ろうえ”を、家の中に招いて座って話を始めた。

「実はな、この前史郎が作った道具の事なんだが」

「ああ、あの家を造った時のね」

「そうだ、あれなんだが俺達でも作ってみたいんだ。それでもっと詳しい作り方を教えてもらいたくて来た」

「いいよ、特に秘密じゃないし。ただ、作るにしても材料を何とかしないと」

「それは、任せておけ。他のみんなも、史郎の道具には興味があるらしいから快く協力してくれるさ」

「分かった。よろしくね」

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

こうして、史郎の授業に新たに工作の時間がプラスされたのだった。

勉強（後書き）

わざわざ読んでいただき、ありがとうございます。

コミケ前一週間になりましたので、たぶん更新は15日以降まで無いかもしれません。ごめんなさい＞＜

出立（前書き）

なんか、寝ようとしたのですがもやもやして書いてしまいましたw
てか、10話目でやっと世界の説明になります^^;

出立

世界

村長から話を聞いた後、史郎は”ろうや”と話のすり合わせをした。

今だ村人たちは、史郎が異世界から来たと言うことを信じていなかった。”ろうや”も例外ではなく、史郎の理解力や様々な知識については大いに評価しているが、異世界云々の話は正直”ろうや”の理解の範疇を超えていたからだ。

史郎も、初めはなんとか理解してもらえないかと考えたが、結局諦めたのだ。正直、異世界から来ようが他国から流れてこようが、ここでの扱いは自分のこれからの行動が物を言うと感じいたからだ。

”ろうや”にしても村人にしても、村の外から来た時点で史郎の事を『他所者』であると認識しているので、日本に来た外国人と同じ扱いだと思えばいいのだと気づいた。すべて一括りに『外人』とする日本人には馴染み深い考え方だ。

つまり、村人にとっては何処から来たかではなく、史郎が村の平穏を乱す者か否かの方が重要だったのだ。

結果、史郎はその試練を乗り越えて村に受け入れられたので、今更異世界云々の話を持ち出すつもりは、史郎にはなかった。

しかし、今回は役人に尋問される可能性がある点で、史郎は”ろうや”と相談することにしたのだ。

ただし、ここで一つ重大な問題があるのだ。

それは史郎がこの世界に流れてきて直ぐの頃、言葉を覚えた辺りに聞いた事だ。

ここはなんていう国なのかと

その間に”ろうや”は、こう答えた。

「人間たちからは、魔の国と呼ばれているが名前は特にないな」と。

それを聞いて、史郎は絶句した。誰だって自分の住んでいる所がそんな物騒な呼ばれ方をしていたら、ビビると思う。

そして分かったことだが”ろうや”を初め、村に住むすべての人間がこの国の詳しい位置や場所を知らなかったのである。

史郎は困惑した、よく異世界にトリップした小説では大体出会った人が、国の名前から世界にどれくらいの間があるとか大陸はいくつ在るとかを説明してくれるが、そんな都合の良い事はどうやら史郎には起きなかったらしい。

必死で聞き出せた情報を箇条書きにすると以下のようなものになる。

・この国に特に名前はない。（人間たちからは魔の国と呼ばれている）

・今住んでいる所は、狼の地と呼ばれている。

・村に特に名前はない。

・海はあるらしい。（村長が、海という言葉と概念を知っていたので在ることが分かった）

・近くに、人間の国が何個かあるらしい。（国名は在るらしいのだが、皆人間の国でまとめられていて、国名が不明。唯一国境を接している国が、セスと呼ばれていることが分かった）

・魔の国は、一応官僚制度があるようで役人が大きな村には定期的に派遣されるらしい。

これが、史郎が村人から必死で聞き出したこの世界の情報の全てだった。

☆

ハッキリ言って、何も分からない。なんで国名がないんだよ!!
しかも人間の国の名前も覚えてないし・・・。

結局分かった事と云えば、ここが魔の国の狼の地であることぐらいだ。

ただ考えてみれば、村人にとって世界がどんな形とか国がいくつあるとかなんて、知る必要が無いのかもしれない。そんなことを知らなくても生活はできるし、別に困らない。まして村から出ないで一生を終える者がほとんどなのだから、せいぜい役人が派遣されてくる村の場所を知っていれば、後は自分たちの縄張り内の地形を覚えていれば済む事なのだ。

人間の国だって、直接国境を接しているセス国以外は関係ないし、まして義務教育もなく郵便すらないので、外の世界の情報を仕入れるのは、ほぼ不可能だ。

つまり、僕はセス国で捨てられてそのまま迷って国境を越えた人間と名乗る以外、道はなかった。

☆

そして、いよいよ出発の日が来た。太陽が昇る前に村の入り口に集合して出発である。

今回は、貢物として毛皮と僕が作った黒曜石のアクセサリーを持つていくことになった。

村では、誰もアクセサリーをしていなかったからそう言う習慣が無いのかと思ったのだが、村長に聞いたところ、役人が派遣される村では少数ながら着けている者が居たらしいので、とりあえず試しに貢物として献上することにした。

「では行つて参ります」

「氣をつけて行くんじゃぞ」

村長を始めとした村人達に見送られながら、僕は村を後にした。今回は”ろうえ”さん達村の若衆から五人、乙名おとなから二人この旅に参加していた。

乙名とは、村の成人して婚姻をしている若衆に属さない人の総称だ。昔の日本の乙名と近い感じの存在で、村の仕切り役的存在だ。主にこの乙名達が役人との交渉に当たるらしい。

本来なら、保護した本人が役人に状況を説明するのが決まりなのだが”ろうや”の立場ではそれが出来ないので、村の乙名を代わりに証言させるらしい。

今回の旅に”ろうや”は参加していない。”ろうや”は村の祭祀を司り、若衆にも乙名にも属さない特別な立場に居るため、滅多なことでは村からは出られないのだ。

☆

道無き道を歩いていた。いや、道は在るのだが滅多に通らないために倒木や落石などで道はかなり荒れていた。

しかも元々道路として設計された道ではなく、自然の人が歩いて出来た道らしく一人一人が通る幅の部分の土が見えているだけの、かなり歩きにくい道だった。

村に来てから毎日肉を食べ、子供たちと遊んだりして脚力が大分付いて来ていたと思っていたのだが、どうやらそれも『人間としては』の範疇だったらしい。

先刻から足先に、痛みを感じていた。どうやら肉刺ができたらしい。普段村から出ない生活をしていたから、慣れない道に早速足が悲鳴をあげたようだ。

隊列で、丁度真ん中に位置する場所に居るのだが、徐々に前の人との感覚が開いていってしまう。

みんなも氣遣ってペースを若干落としてくれているようだが、それでもきつい。

普段から、狩りで足腰を鍛えている皆はこれくらい平気なのだろうが、正直かなりこの先の行程に不安を覚える。

しばらく歩いて”ろうえ”さんが休憩を入れてくれた。どうやら予定外の休憩らしいが、正直ありがたかった。

「大丈夫か？」

「すみません・・・、少し休めば行けますから」

「無理するな。人間は体力が俺たちより無いのだから、気にすることじゃない」

”ろうえ”さんは、そう言って僕のおでこの汗を拭ってくれた。その仕草は明らかに大人が子供を氣遣うしぐさだったが、僕はとて

も気持ちよくてされるがままだった。

休憩も終わり、また歩いて行くと何処からか水音が聞こえてきた。
どうやら川の音らしい。しばらく進むと谷が見えてきた。

「ここが大体役人がある村との中間地点だ」

「え、もう中間地点なんですか？」

「ああ、ただしこの川を越えるには上流に一日かけて行かなければ
ならない」

「初めに3日かかると聞いていたけど、この川がなければ一日で行
けるのか」

「ああ、流れも急で兩岸の斜面もきついから上流に迂回しないところ
の川は渡れないんだ」

「たしかに”ろうえ”の言う通り川は水量も豊富で流れも早く、し
かも兩岸は切り立った崖で見るからに危険だった。

橋があればかなり交通の便は解消されそうだけど、今の交通量を
考えると迂回ルートを通るコースでも問題ないのかもしれない。あ
るいは、橋を架ける発想や技術が無いのかもしれないけど。

☆

その後、川沿いを陽が沈むまで進み、その日はそこで野宿をして翌日川を渡り、また一日かけて今度は下り、反対側の岸辺で野宿をしたのだった。

そして、ようやく三日目にして役人がある村に到着することができた。

その時史郎は、かなり疲れていたらしく村に着くなり倒れてしまい、結局役人に面会したのは翌日になってからの事だった。

出立（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！！
てか、説明文ばかりで会話が殆ど無い・・・^^；

こんなので、読者が喜んでくれているのか最近かなり悩んでおります。

今回は、恐らく役人の居る村の観光がメインになると思いますが、書いたら別なものになっているかもしれない・・・。

その時は、ゴメンナサイ＞＜

望郷（前書き）

ある方の、エッセイを見て自分の小説に足りない要素を追加。
ましに成るかは不明ですが・・・。

望郷

思い

ぼんやりした中に、僕が漂っている。なんとなくここが夢のなかだと分かる。

昨日は結局村に着いて、体調を崩して寝てしまったのを思い出した。

ぼんやりと、何かが見えてきた。ああ、あれは一年前の自分だ。

平穏だった。

治安が良くて毎日の食事に苦勞することもなく、休日には趣味の古寺名刹めぐりや遺跡調査。たまに知り合いと飲み会をしてワイワイやっている自分がいた。

寒さに震えることもなく、毎日暖かいお風呂には入れて清潔で柔らかな布団で好きな時に眠れた。

なにより、大好きな本に囲まれて生活できるのが嬉しかった。一人暮らしを始めてから、無駄を省いては本を買いあさり、延々と役には立たない無駄な知識を知って楽しんでいた。

とても充実していた。それこそ何の不満もない生活。

今でも帰りたい。出来れば今直ぐに。

だけど、同時に別の気持ちもあった。

僕は今年で27になる。向こうとこっちの時間が仮に同じだとしたら、一年失踪した事になる。

家族は、特別仲が悪いわけではないがもう五年も連絡すら取っていない。

恋人もいなかった。友達も、たまに遊ぶ仲間はいたけれど、いざという時頼れる人はいなかった。

だから、このまま自分が帰らなくてもだれも困りはしない。

人間の死は、生物的死と社会的な死とで分けることができると思う。

生物的死は、文字通り心臓が止まって死ぬか脳が機能を停止して死ぬかのどちらかである。

これは別に避けられないことで、ある意味割り切れる部分がある。だけど、社会的死は違う。

生物的には生きていても、社会が他人が自分を認識してくれないのである。

フリーターをやっている時点で、ある意味社会的にはもう死んでいるのかもしれない。

それでもなんとか世間の片隅で生きてこれたのだ。

だが、一年も行方不明で帰ってきて。果たして自分の居場所はあるのか？

もちろん家族も居るだろうし、友達もまだ自分のことを覚えていてくれるだろう。

仕事だって、探せばいくらでも見つかる。居場所が無くなっていても作ればいい。

そう思うかもしれない、だけど違うのだ。

日本という社会は、一度ドロップアウトした人間にはかなり厳しい。

再起を決意してバリバリできる人間だったら、そもそも26までフリーターをやってなんて居ない。

この世界に飛ばされて、必死で自分の居場所を確保した。

この世界は、成果が即自分の生死に直結する。それは時にスリリングで、博打のような場面も度々あった。

病気で命を落としかけたり、獣に襲われて喰われそうになったこともあった。

だけど、その分結果が目に見えて出るのだ。

生きるか死ぬかのチキンレースを、何時しか楽しむようになっていた自分は何処か狂ってしまったのかかもしれない。

だけど、こちらの世界での生活は日本とは別の、得ることができない感覚を自分に味合わせてくれた。

それは、植物の根のように自分の中に根を下ろし、何時しか心の深い部分にまで到達していた。

そして、今回の正式に村人に迎えられた時。自分の中でこの世界は現実^{リアル}に成ったのだ。

もうこの世界は、自分の中では異世界では無い。れっきとした世界だった。

そうになると、日本に帰ってまた一から同じ事をするのが、とても嫌になった。

住めば都と昔から言うが、今まで身近にあった生活用品もなければ無いで案外生活できる。

帰りたい気持ちと同時に、同じくらいここに永住してもいいかもしれないと思っている自分がいるのだ。

もちろん、日本とここが今すぐに通行自由になれば日本に帰ると思う。

だけど、こちらの世界とあちらの世界を渡る方法がわからない以上、日本に帰るといふ選択肢は直ぐに採りたくない気持ちが芽生えているのだ。

結局、自分はこの世界にすっかり魅了されてしまっていたのだ。

帰った時の苦勞と、こちらの世界の魅力とを比べると若干後者のほうが大きいくらいに。

だから、たとえ日本に帰る手段が判ったとしても、それは非常手段として温存し、この世界の生活をもっと楽しみたいと思っている。一度しかない人生なんだから、ここでやれるだけのことはやりたい。

この世界は、まだまだ発展途上なのだ。自分が、この世界そのものをどうこう出来るとは思っていないけど、できることがあればやってみたい。

だから、僕は日本を夢に見ながらこの世界でしばらく生きて行くことにする。

何時かまた、祖国に帰れる夢を見ながら・・・。

望郷（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

今回は、異世界での心境の変化を題材に書いてみました。

実際、戦後海外に残った残留邦人の方の話を色々聞くと帰りたいたい気持ちと、現地での生活でかなり悩んでおられる方が多かった記憶があります。

現実と思いの出の狭間で、主人公も揺れ動いているようです。

今後、日本に帰る手段が見つかった時、史郎はどうするのかまだ私にもわかりません。

それでは、またしばらく投稿間隔が空くと思いますが気長にお待ちいただけると幸いです。

では、失礼致します。

村（前書き）

おまたせしました。いよいよ尋問と村の観光の話です。
まだまだ話は動きませんが、どうぞ暖かく見ていただけると幸いです。

村

出会い

チュンチュンと、小鳥の鳴き声がする。

どうやら朝らしい。先ほどの夢を思い出しながら、史郎は頭を切り替えるべく寢床から起きだした。

この世界に落ちてから、夢なんて殆ど見なかったのに。やっぱり疲れているのかな？

そんな事を思いながら、史郎は取り敢えず顔を洗いに行くことにした。

今居るのは、村の宿泊施設だ。

この村は、このあたりを統括する役人が来るため、他の村からも人が来る謂わばこの地域のまとめ役的な存在らしい。

役所的なものがあり、そこにこの国の中央から役人が定期的に派遣されて、このあたりを管理しているらしい。

宿泊施設があるのも、おそらくこの村へ近隣の村から貢ぎ物を運ぶために来た人たちが、泊まっていくためだろう。

今は史郎達以外にも、幾人かの獣人達が宿泊している。

泊まっているのは、ネコ科の獣人（おそらく虎系）と草食獣の獣

人（山羊系？）の獣人たちだった。

初めて見たその種族の獣人達に、思わず目を見張っていた史郎だが、相手も人間が珍しいのか、かなりこちらを警戒していた。

「さてと、水は何処かな」

取り敢えず家から出て水場を探すことにした。

宿泊施設は大きくて所謂ウナギの寝床型の建物で、床に雑魚寝をするタイプだった。

一応床に干し草が敷いてあったのは、おそらく客人を泊めるためだろう。

そのおかげで、史郎は硬い地面に直接寝る事態は避けることができた。

水場を求めてふらふらと村を見てまわる。昨日は夕方近くに到着して、殆ど村を見ることがなかったから、こうして村をじっくり見れるのはこれが初めてだった。

村は結構な広さがあり、村の周りには環濠と丸太の堀が張り巡らされていて、なかなか堅牢な造りのようだ。

日本で言えば、弥生時代の環濠集落にとっても近い構造なのかもしれない。

家は数えただけで30は超えている。住宅以外にも大型の建物が見えるから、おそらくあれがこの村の役所の様な役割をしているの

だろう。

一部の家からは、煙が出ているのでおそらく囲炉裏が室内に設えられているのかもしれない。

自分が住んでいる村は、どうやらかなり鄙びてるようだ。せめてこの村ぐらいには発展していて欲しかった。

環濠があるということは、この村はおそらく人間と何かあった時の前線基地の役割も果たしているのかもしれない。ただ、備え的にはかなり貧弱だから人間も滅多に攻めてこないのかもしれないが。

一通り村を見回し、村の外の小川の水を使うと分かり、危険もなさそうなので小川に向かうことにした。

小川は村の環濠に注いでいて、環濠はどうやら近くの池か川に繋がっているようだ。

村から出て、小川に着くと他にも何人かの獣人がいて、こちらを伺うように見ていた。

うーん、ちょっと気になるけど何もしてこなさそうだから大丈夫かな。

そう思いながら、史郎は顔を小川で洗うことにした。

「つめてえ！」

小川の水は雪解け水らしく、とても澄んでいて冷たかった。

どうやら、村の飲水も兼ねているらしく先刻いた獣人達は、朝の一杯を飲みに来たらしく、手で水をすくって飲むと早々に去っていった。

「よし、取り敢えず今日は頑張らないとな・・・」

今日はいよいよ役人に会う日だ。いくら説明をしなくてもいいとは言え流石に緊張する。

史郎は、予め言葉が不自由な様に装うことを乙名達から言われていた。

言葉が不自由な振りをすれば、突っ込まれた質問をされる恐れはないだろうというのが、村長達が出した結論だった。

そのため、史郎は昨日村に来た時からあまり言葉を話していない。

短い単語で「寝る」とか「飯」とかを話すくらいだ。

ぼんやりと、そんな事を考えている内に先程から小川で水を飲んでた獣人がこちらをじっと見ているのに気づいた。

年の頃はおそらく成人しているだろう感じで、狼獣人らしくスラリとしたマズルと美しい灰銀色の毛並みが綺麗な、雄の獣人だった。

なぜこっちを見ているのか、気になって見返すと相手もそれに気づいたのか、こちらをじっと見ている。

それに興味を持った史郎は、思わす声をかけていた。

「こんにちは」

「あ……。おはよう」

「なに？」

「あ、いや……。お前は人間か？」

「うん」

「なぜここに居る？」

「オレ、狼の地」

「ああ、昨日来た狼の地の奴か」

「うん」

「狼の地は人間が居るのか？」

「オレだけ」

「そうか……」

たどたどしく、わざと会話しながら史郎は相手を観察していた。

狼獣人の中でも、大柄に入るだろう大きな体と、栄養がいいのか毛並みも良くかなりの力のある獣人だと推測できる。首から胸飾りのようなものを掛けている。

胸飾りは何かの繊維で編まれたひも状の飾りで、複数の色が使われていてミサंगाのような感じだった。

村に入ってまだほとんど村の住人には会っていないが、おそらく胸飾りを着けることはあまり一般的ではないのではないのかと思う。

と、云うことは村の何らかの祭祀や役職に付いている人物ではないかと推測する。

村の若衆の実力者かな？

そんな事を思いながら、ジロジロと思わず見ていた。

「・・・、オレになにか付いているか？」

「別に・・・」

相手の獣人は、史郎がジロジロ見ていた事を不思議に思ったらしい。

取り敢えず、これ以上は不味そうなので観察をやめると村に戻ることにした。

村に戻ると、一緒に来ていた獣人達が史郎のことを探していた。

「おい、何処行ってた！」

「ごめんなさい。ちょっと水場・行ってた」

「行くならせめて誰かに声をかけろ、みんな心配していたんだぞ」

「すみません」

「無事ならいい。次からは、ちゃんと声をかけろよ」

「はい」

”ろうえ”さんに怒られれて、自分のせいでみんなに心配をかけてしまった事がわかり、反省した。

ここは”他所”なのだ。彼らの縄張りの外だ。この世界はそれこそ自分たちの縄張り内ですら危険なのだ。他所の縄張りに居るのなら、尚更警戒心を持たなければならない。

まだまだ日本の時の感覚のままだった自分を、改めて自覚した僕は素直に”ろうえ”さん達に謝り、役所に向かう準備をした。

☆

それからしばらくして、役人の居る建物に向かった。家は朝見た時に見えた、一番大きな建物だ。

中に入るのかと思ったが、そうではなく外の広場のようになってる場所に向かった。

その場所には石の板が中央に一個あり、皆はその石と建物との反対側に並んで座わった。

皆胡座をかいで、座っている。こちらでは頭を下げるなどの儀礼は特にないらしく、事前に村長から聞いていた通りに座って前を見ていた。

そこには予め石の反対側に人がいて、こちらに向かって「しばらく待て」と告げと、建物の中に入っていった。

しばらくして、何人かの人が出てきた。

その中には朝、あの水場にいた狼の青年もいた。

出てきた人達の人種は、ほとんどが狼獣人で、一人だけ鳥獣人がいた。

その鳥獣人が広場の中央の石に腰をおろしたので、その獣人がおそらくこの中で一番身分がある獣人なのだろう。

「そち達が狼の地より来た者たちか？」

「へい、そうで御座います」

「今日は、貢ぎ物を持ってきたのか」

「へえ、それと、この者の件でお知らせすることがございました。その件も兼ねてこちらに伺いました」

「その者とは、この人間か？」

「そうで御座います」

乙名達に紹介されて、史郎は石に座る鳥獣人を改めて見た。

おそらく猛禽類だろう感じの獣人だ。鋭い目付きと太い足。立派な鉤爪を持ち、手から腕にかけ翼の名残りなのだろう羽毛が生えていた。

体には簡単な布でできた服をまとい、胸には朝あの狼青年がしていた物よりも立派な胸飾りがあり、くちばしに装身具なのだろうくちばし飾りが付けられていた。

他の役人も服は着ていないが、胸飾りを着けているのでおそらくあれが役人の証なのかもしれない。

一緒に来た役人たちは、鳥獣人の後ろで話をじっと聞いていたが、例の狼の青年だけは手に紐のような物を持っていた。

「そちは、何者だ？」

「あ・・・オレ・・・」

「恐れながら、この者は未だ言葉が不自由でして、説明は私が致します」

すかさず乙名の一人が打ち合わせ通りに話に入ってきて、史郎は時折首をたまに振ったり短い返事を返すだけで、尋問は終わった。

その間、史郎はじっと役人の後ろで控えている狼獣人の手の中にある紐を見ていた。

☆

史郎の取り調べは、結局たいして突っ込まれることもなく終わった。乙名達が粗方事情を話すと、役人もその話に納得がいったらしく史郎に二・三質問をして、その後貢ぎ物を受け取り取り調べは終了になった。

「疲れた・・・」

「大丈夫か？」

「平気」

”ろうえ”に氣遣われながら、史郎は先程の出来事を考えていた。

あの狼獣人が持っていた紐について、史郎は思い当たる事があった。

それを確かめるには、もう一度彼に会わなければならない思いつつ、取り敢えずやることが終わった開放感を味わうべく、史郎は”ろうえ”達に声をかけて村を散策するのだった。

村（後書き）

短くてごめんなさい＞＜
近いうちに、また更新しますのでお待ちください。

文明（前書き）

ご無沙汰しております。久々の投稿で申し訳ありません^^；
現在、なかなか筆が進まずに色々と考えております。

これからも、スローテンポで更新すると思いますが、何卒ご容赦ください。

文明

官吏

取り敢えず、史郎は村を見て廻ることにした。

今は日中だからか、村人たちもチラホラと見ることができた。

村長が話していた通り、村人たちの中で何人かの村人が装身具を着けていた。

貝殻と思われるもので作られた、首飾りや色系で編まれたミサングのような物、大体が小さくて体の動きを邪魔しない簡素なものだった。

主に着けているのが立派な体格の雄だったりするところから、おそらく何らかの権力や富を持っている人達が着けているのかもしれない。

雌達は意外に地味で、着飾ることをしないようだ。

人間の場合、爪や牙を持たないために非力である。そして女性は外敵から身を守ってもらうために男性に選んでもらうように自らを装飾した。

たしか、そんな話を聞いたことがある。実際自然界では雄が派手で雌が地味というのが一般的なのではないだろうか。

美しい羽色の鳥は大体雄で、雌は外敵に見つからないように保護

色になっている場合が多い。

狼は知らないけど、犬は雌の方に雄を選ぶ権限がある。だからここでもおそらく同じようなことが行われているのではないだろうか。

村の塀に寄りかかってじっと村を眺めていると、この村は狼獣人がメインで他にも数種類の獣人が住んでいることが分かる。

自分の村が、人口が75名で僕以外全部狼獣人なことを考えると、この村はどのように運営されているんだろうと考えてしまう。

うちの村は、村長・乙名・祈祷師・若衆・女組の5つのグループがあり村長は世襲ではなく、前代の村長が死ぬ前にふさわしい人物を事前に指名しておくか、死後村の寄り合いによって新しい村長を立てるようだ。

乙名は成人して若衆に入り、その後結婚して若衆を出た成人の雄を指す。

若衆は、成人を認められた雄が入るグループで村の働き手である彼らの発言力はとても大きい。

女組は、成人を迎えた雌が入る組織でその中で子育ての手伝いをしたりして、雌として必要な知識や経験を得る大事な組織だ。

寄り合いでの発言力はかなり強く、順位的には若衆と同じか若干上ぐらいな感じである。

最後に祈祷師だが、これはちょっと特殊で村の中でも特別存在として扱われる。

実は”ろうや”は村の出身ではない。他所の村から流れ着いてきた雄らしい。その当時”ろうや”は成人前の子供だった。

理由は分からないが、孤児になり村にたどり着いた。そこで先代の祈祷師に才能を認められて後継者に指名されて、現在に至るらしい。

祈祷師は、薬草の知識や祈祷などの所謂医師と神職を合わせたような役割で、世襲ではなく才能のある子供を見出して教育して後継者にするらしい。

”ろうや”も”ろう”によく様々な薬草を教えている。恐らく”ろうや”は”ろう”を自分の後継者として育てようとしているのだろう。

ただ”ろう”自身はあまりその事が好きでないらしく、どちらかと言えば狩りをする方が好きなようだ。

僕も”ろう”の勉強に付き合っていたおかげで、この世界の薬草の知識がだいぶ身についた。ただし、これは獣人限定みたいでしかも種族によってもバラバラだそうだ。

村人のほとんどが何らかの血縁関係で結ばれているので、あの村の結束はかなり堅い。

それから見れば、この村はかなりすごいと思う。おそらく人口は200名ぐらいの規模で、多種族と共存しているのだ。おそらく何らかのルールを決めてそれを守らせる存在がこの村にはあるのではないだろうか。

それが、おそらくこの村の役人なのかもしれない。

そんな事を考えながら、史郎はある用事を果たすべく、寄りかかっていた塀から身を起こすと、村の人達に声をかけに行っただった。

最初は、この村なら簡単に手に入ると思った。囲炉裏もあるし料理もしていそうだから、絶対にだれか持っていると思った。

しかし、それが自分の願望が見せた甘い予想だったと思い知らされた。

拙いしゃべりで必死にあるものを探していると訴えたのだが、皆返事は「無い」だった。

史郎はそれを聞いたたびに気が重くなるのを感じていた。

絶対にあるはずなんだ、草食獣の獣人も居るのだから。

実際、草食獣の獣人が居るためかその単語自体は存在し、相手もそれが何であるかは理解できたようだ。

しかし、この村では住んでいる住人が恐らくほぼ全員肉食獣系の獣人なので、必要がないのか実物は手に入らなかった。

結局村の殆どの人達に声をかける羽目になったが、成果は出なかった。

日もすっかり暮れてしまい、史郎は仕方なく宿舎に帰ることにし

た。

その後、宿舎に戻った史郎は待っていた仲間から心配され、また謝るはめになったそう。

☆

翌日、今日は村を発つ日だ。

史郎は焦りを感じていた、昨日から探していたものが手に入らないと、非常に困った事態になると分かっていたからだ。

どうしようかと悩みながらも出立を遅らせるわけにもいかず、史郎は悶々としながら朝の身支度を整えるべく水場に向かったのだ。

小川の水で顔を洗っていると、昨日と同じく何人かの獣人が水場に来ていた。

その中に、例の狼獣人の青年を見つけた。

丁度水場に来たところらしく、川から水を掬って飲んでいるところだった。

史郎はそこで昨日自分が抱いた疑問を解決すべく、彼に質問することにした。

今はそんな事をしている場合じゃないはずなのだが、一度抱いた疑問は解消しないと気が済まない性質の史郎はそれを実行することにした。

「おはようございます」

「君は、昨日の子だね」

「はい」

「今日はどうしたのかな」

「昨日の、時・手に紐あった」

「もしかして、昨日のお白州の時の事かな？」

「うん」

「それが何か？」

「あれ、なに？」

「ああ、人間は知らないのか。あれは『結縄』だよ」

「『結縄』？」

「紐を結んで、記録を残すものさ。貢ぎ物の数や種類を記録するのに使う。」

やっぱりそうか。睨んだ通りだ。

日本で言えば縄文字と言われる物で、海外だと彼の有名なインカ帝国でキープと呼ばれていた物だ。

色とりどりの紐と結び目で、数などを記録することができる文字に近いものだ。

恐らく、この国では文字の代わりにその結縄があったからこそ、初期の官僚制が生まれ国家を運営することができたのだろう。

インカ帝国も、その広大な領土を文字を使わずキープで統治することができた事を考えれば、この世界でもそれが行われていても何ら不思議はない。

そして彼は恐らくエリートだ。

所謂書記にあたる役人なのだろう。

書記は、古代の官僚国家では重要な位置を占めていた。古代では文字を書く事と読む事ができるのは、専門に訓練された書記以外には殆どいなかった。

王とて例外ではなく、読み書きができない王も居て、基本的に読み書きは書記（役人）の仕事であるという認識があったようだ。

ただし、これは紀元前の四大文明の時代のことです。後の時代になってくると、識字率の高まりと共に王や皇帝も読み書きができるようになっていった。

この世界の文明のレベルがどの程度なのか、僕にはまだわからないが、恐らく古代エジプトやメソポタミア文明と同じくらいの文明の黎明期に近い世界なのかもしれない。

そう考えると彼は、相当社会的地位が高い人物であろう。

つまり頭が良くて、他の人が持っていない物も持っている可能性がある。

そこで僕は賭けに出ることにした。

もし彼が、僕の目的のものを持っていないければ、かなりまずい事態になる。

僕は緊張しながら、けれどそうとは悟られないように慎重に、言葉をついた。

「あの」

「なんだ？」

「塩、持ってる？」

「塩？何に使うんだ？」

「オレ、塩無いとダメ」

「ダメ？」

「死んでしまう」

「人間は、塩がないとダメなのか？」

「ダメ。死ぬ」

「そうなのか、確かに草食の者たちも塩を食さないと死ぬと聞いたことがある。人間もそうなのか」

「そう」

「ふむ、塩か・・・」

「お願いします!!」

僕は、勢い良く地面に膝をつくど土下座をしていた。

たぶん相手はそれが土下座というものと知らないだろうが、必死さをアピールするには丁度いいアクションだと思っでしていた。

「うーん、塩は貴重品だ。この辺では採れる所がないからな」

「もし、くれるならこれ・あげる」

「何だそれは？」

「『メモ帳と鉛筆』」

「聞いたことのないものだ」

僕は肌身離さず持っていた鞆から紙と鉛筆を取り出すと、彼の前に掲げてみせた。

この世界では未だ貨幣経済になっておらず、主にバーター取引、つまり物々交換で物を取引している世界だ。

自分がなにか欲しいと思ったら、それ相応の物を用意しなくては
いけない。

僕がこの世界に来た時、この世界の住人にとって魅力的な品はほ
とんど持っていなかった。

しかし彼は書記だ。だからこの紙と鉛筆に興味を抱くはずだ。た
だこれを見せただけではインパクトが足りないので、僕は更に工夫
をすることにした。

「『文字』知ってる？」

「『文字』？聞いたことがないな。」

「例えば【k a w a】書く」

僕は、辺りにあった木の棒で地面にカタカナで『カワ』と書いて
みせた。

狼の青年は、興味深そうにそれを見ている。

「なあ、今から俺が言うことを書いてみてくれないか？」

「いいよ」

それから、彼が話す言葉をカタカナで音写していく。

しばらくして、青年は唸りながら「これは・・・」とか「つかえる
か?・・・」などと独り言を言っていた。

そして最後の一押しとして、僕は先ほど示したメモ帳と鉛筆を再度取り出し、そこに文字を書いて見せた。

「便利」

それを見て、狼の青年はやっとメモ帳と鉛筆の使い方と価値を理解したようだ。

おまけとして、カタカナの50音順の表（48音しか書いていないが）を書いてみせて解説する。

すると青年は、しばらく考えると徐に予定を聞いてきた。

「お前はいつまでこの村にいる？」

「今日、村・出る」

「今日だと！？・・・わかった、後で村の入口で会おう」

そう言う青年は、駆け足で村に戻っていったのだった。

これはかなり期待できるかもしれないと思いつつ、史郎もゆっくりと村に戻るのだった。

☆

それから村に戻って出立の準備をして、朝食を取ると僕達は村の

入口まで来ていた。

青年は、未だに現れない。

どうしよう、出発を遅らせる訳にはいかないし、このまま行けば折角のチャンスをみすみす逃すことになる。

史郎は焦っていた。

「おい、そろそろ行くぞ」

”ろうえ”さんが僕に一声掛けると、皆村に背を向けて歩き出した。

僕も仕方なくその後についていこうとしたその時。

「おい！！待ってくれ！！」

突然あたりに大声が響いた。例の狼の青年が大急ぎで走ってくるのがわかった。

「ハアハア・・・、待っているといったはずだが・・・」

「ごめんなさい・・・」

「まあいい、それよりお前が欲しがっていたのはこれだろ？」

青年の手には、拳より大きな岩のようなものが握られていた。

その一見岩に見えるものは、恐らく岩塩だろう。

それを僕に渡すと、青年は「これでいいのдар？」と、聞いてきたので僕はその岩を一舐めして確認し、勢い良く頭を縦に振っていた。

「それじゃあ、渡してくれるか。あれを」

「うん」

僕は今もらった岩塩を鞆にしまうと、そこから鉛筆とメモ帳を取り出して青年に手渡した。

「確かに受け取った」

「ありがとう」

僕は青年にお礼を言うと、青年はもうメモ帳と鉛筆に夢中で適当に「ああ」などと言いながら、村へと戻っていったのだった。

その一部始終を見ていた仲間たちから視線で説明を求められ、歩きながらその経緯を説明しつつ、僕達は家路につくのだった。

文明（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

一応、村のことを色々書いてみたのですが、作者の力不足で中途半端になってしまいました。

もしかしたら訂正するかもしれませんが、取り敢えずこのまま書きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1416v/>

やっぱ異世界トリップは甘くなかった・・・

2011年8月30日12時39分発行